ISSN 2187-8781

令和８年版
年　　報

Annual Report 2026

第４８号

国立研究開発法人 森林研究・整備機構
森林総合研究所多摩森林科学園
Tama Forest Science Garden
Forestry and Forest Products Research Institute

まえがき

国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所は森林科学関連分野を総合的に扱う我が国唯一の中核的な試験研究機関です。多摩森林科学園は森林総合研究所の支所の 1 つとして、都市近郊林とそこに生息する動植物の生態や保全、森林の空間利用、またサクラ遺伝資源の保存やサクラ類の病害に関する研究などを行っています。

令和 3 年度にスタートした第 5 期中長期計画期間の最終年度である令和 7 年度において、当園の 14 名の研究職員は運営交付金による 7 つの実施課題と、主に外部研究資金による 18 のプロジェクト課題を担当しました。これらのうち「身近な森林を題材に環境を学ぶ学習プログラムの開発」、「ツキノワグマの出没メカニズムの高度化と出没リスクの管理手法の開発」の 2 つは、当園職員が研究代表者となって令和 7 年度から新たに開始したプロジェクト課題です。

令和 7 年度は幸いにも前年のような大きな気象災害は発生せず、引き続き公開エリアを限定しているものの、樹木園、サクラ保存林及び森の科学館を通年で公開し、さまざまな普及広報活動を実施、また園児から大学生までの学習入園や視察の受入れをすることができました。

樹木園では、平日に計 136 回の「ガイドツアー」を開催し、当園職員が案内役となって園内の動植物に親しんでいただきました。また体験型イベントとして「冬虫夏草観察会」、「夏休みこども昆虫教室」、「身近な緑をまもるための植物観察」、「くさぶえ体験」、「きのこ観察会」を実施し、幼児から高齢者までの幅広い世代のご参加をいただきました。

サクラ保存林の開花時期には令和 7 年 4 月だけで 8,454 人もの来園があり、全国各地から収集保存されているさまざまな品種を鑑賞していただきました。昭和 40 年代に造成が始まったサクラ保存林は現在、サクラの高齢化等の課題も抱えていますが、鑑賞目的に加え、学術的にも貴重な遺伝資源として、苗木増殖による世代交代や病虫害対策等に努力しているところです。

森の科学館では、森林総合研究所（つくば市）、北海道支所、関西支所、九州支所の研究者を講師として「樹木に不可欠な水は木材利用の悩みの種」をはじめとする計 9 回の「森林講座」を実施しました。また 9 〜11 月には企画展「クマ－かわいい？こわい？―〝知る〟という選択」を開催しました。人身被害の発生によってクマに対する社会的関心が高まった時期と重なり、多くの来場と反響がありました。

森林研究・整備機構は令和 8 年度から第 6 期中長期計画に移行し、森林の生物多様性の評価と保全に向けた研究開発や、森林病虫獣害防除技術、森林資源の持続的利用と山村地域の活性化のための研究開発等に取り組むこととしております。多摩森林科学園は大都市近郊に位置する特性を生かし、引き続きこれら研究開発の一翼を担うとともに、樹木園、サクラ保存林及び森の科学館を活用した普及広報等を通じ、森林・林業・木材産業に対する幅広い世代の関心を高め、地域に貢献してまいりたいと考えております。多摩森林科学園への一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和 8 年 10 月

多摩森林科学園長　細田和男

目　　次

１　まえがき

２　目　　次

３　令和７年度 研究課題一覧 …… 1

４　令和７年度 研究課題実施概要 …… 3

５　令和７年度 研究発表業績一覧 …… 12

６　研究協力
　１．受託研修 …… 19
　２．受託出張 …… 19
　３．海外出張 …… 23
　４．シンポジウム等 …… 23

７　研究資料
　１．令和７年気象観測資料 …… 24
　　表１　日平均気温 …… 27
　　表２　日最高気温 …… 28
　　表３　日最低気温 …… 29
　　表４　日降水量 …… 30
　　表５　令和７年気象表 …… 31
　　表６　４７年間の平均気象（気温・降水量） …… 31

８　普及広報の概況
　１．一般公開における入園者数の内訳 …… 32
　２．森林講座・特別観察会の開催状況 …… 33
　３．各種取材等への協力 …… 34
　４．刊行物 …… 37
　５．イベント …… 37
　６．ガイドツアー開催回数 …… 37
　７．森の科学館および野外展示概要 …… 38
　（資料８－１）企画展 …… 41
　（資料８－２）特別観察会 …… 46
　（資料８－３）野外展示：園内解説板の維持 …… 52

９　視察受入・学習入園・特別入園
　１．視察受入 …… 53
　２．学習入園 …… 53
　３．特別入園 …… 53

１０　整備計画等の実行状況
　１．基盤整備等 …… 54
　２．その他の整備 …… 55

３．環境教育林委員会　…… 56
（資料１０－１）「外来植物駆除デー」の実施　…… 57
（資料１０－２）オオキンケイギク（特定外来生物）の駆除　…… 60

１１　参考資料

１．沿革　…… 62
２．職員の異動　…… 63
３．組織　…… 64
４．土地及び施設　…… 65

令和７年度 研究課題一覧

課題番号	戦略課題・基幹課題・実施課題	研究年度	**代表者** 分担者	予算区分
1　環境変動下での森林の多面的機能の発揮に向けた研究開発［重点課題］				
		令和		
1イ［戦略課題］	**森林生物の多様性と機能解明に基づく持続可能性に資する研究開発**			
1イａ［基幹課題］	生態系からみた森林の生物多様性に関する研究開発			
1イａ１［実施課題］	生態系からみた森林の生物多様性に関する研究の高度化	３～７	阿部 真 設樂 拓人	交付金
1イａＰＦ４７	気候変動で森林群集の種組成はどう変わるのか？：分布予測モデルによる時空間変動予測	５～８	**設樂 拓人**	科研費
1イaＰＦ５４	土埋木を用いた木曽ヒノキ林の復元とヒノキ三代の親子鑑定	６～８	松本 麻子	科研費
1イａＰＦ６６	完新世中期の温暖気候下における樹木分布の高精度・学際的手法による解明	７～９	設樂 拓人	科研費
1イａＰＳ２	都市気候シミュレーションによる都市近郊の森林植生の分布変化の推定	６～７	**設樂 拓人**	交付金プロ
1イｂ［基幹課題］	生物機能からみた森林の生物多様性に関する研究開発			
1イｂ１［実施課題］	生物機能からみた森林の生物多様性に関する研究の高度化	３～７	加藤 珠理	交付金
1イｂＰＦ３８	遺伝解析・先進センシング・長期観測データの統合による樹木結実豊凶制御機構の解明	６～９	松本 麻子	科研費
1イｃ［基幹課題］	森林の生物多様性の保全と持続可能な利用に関する研究開発			
1イｃ１［実施課題］	森林の生物多様性の保全と持続可能な利用に関する研究の高度化	３～７	井上 大成 中村 祥子 林 典子	交付金
1イｃＰＦ３５	農業生産に不可欠な生態系サービスの効率的な評価技術の開発	５～９	中村 祥子	政府等受託
1イｃＰＦ３９	種子食性ショウジョウバエにおける同所・季節的寄主転換の生態・遺伝的背景	６～９	**中村 祥子** 設楽拓人	科研費
1イｃＰＦ４２	匂いか色か？植物ウイルスの感染が促進する送粉者の行動変容と植物の種分化	７～１０	中村 祥子	科研費

課題番号	戦略課題・基幹課題・実施課題	研究年度	**代表者** 分担者	予算区分
２　森林資源の活用による循環型社会の実現と山村振興に資する研究開発［重点課題］				
２ア［戦略課題］	**林産物の安定供給と多様な森林空間利用の促進に資する研究開発**			
２ア a［基幹課題］	維持管理コストの低い森林造成に向けた造林・育林技術の開発			
２ア a １［実施課題］	造林・育林技術の実証とシーズ創出に向けた研究開発	３～７	阿部 真 島田 和則 岩本 宏二郎	交付金
２ア a ＰＦ１５	効果的な花粉発生源対策の実施に向けた調査及び普及	５～７	阿部 真	政府等受託
２ア c［基幹課題］	森林資源・空間の持続的な利用のための評価・計画・管理技術の開発			
２ア c １［実施課題］	持続的な林業経営および森林空間利用のための評価・計画・管理技術の開発	３～７	井上 真理子	交付金
２ア c ＰＦ２６	身近な森林を題材に環境を学ぶ学習プログラムの開発－専門教育と普通教育とをつなぐ	７～１０	**井上 真理子** 平野 悠一郎	科研費
２ア c ＰＳ２	無関心層を取り込んだ森林空間利用促進のためのアウトリーチ手法の提案	５～７	井上 真理子 平野 悠一郎	交付金プロ
２ア d［基幹課題］	健全な林業経営確立、山村地域振興、持続的木材利用、新たな木材需要創出に資する方策の提示			
２ア d １［実施課題］	多様化する森林との関わりを支える社会経済的・政策的方策の提示	３～７	平野 悠一郎 山田 茂樹	交付金
２ア d ＰＦ１３	科学的林業の受容と変容に関する国際比較研究：現場森林官が持つ仕事観に着目して	４～７	平野 悠一郎	科研費
２イ［戦略課題］	**生物特性を活用した防除技術ときのこ等微生物利用技術の開発**			
２イ a［基幹課題］	森林・林業・林産物に対する病虫獣害軽減技術体系の開発			
２イ a １［実施課題］	樹木・林業病害の実効的制御技術の開発	３～７	長谷川 絵里	交付金
２イ a ＰＦ５０	土着天敵寄生蜂を用いたシイタケ害虫キノコバエ類の総合的生物防除技術の開発	５～７	中村 祥子	科研費
２イ a ＰＦ６１	日本と木材輸出相手国の樹木を外来病害虫から護る複合リスク緩和手法の開発	６～１０	平野 悠一郎	政府等受託
２イ a ＰＦ６３	令和７年度高度な森林鳥獣被害防除手法の標準化推進事業	６～７	**岡 輝樹**	政府等受託
２イ a ＰＦ７１	ツキノワグマの出没メカニズムの高度化と出没リスクの管理手法の開発	７～９	**岡 輝樹**	政府等外受託
２イ a ＰＳ１４	樹木の倒伏リスク診断技術の開発	７～９	長谷川 絵里	交付金プロ
２イ b［基幹課題］	きのこ等微生物の特性解明と生産利用技術の開発			
２イ b ＰＦ２３	花粉飛散防止剤早期実用化促進事業	６～７	阿部 真	政府等受託

令和７年度 研究課題実施概要

課題番号：１イａ１
課 題 名：生態系からみた森林の生物多様性に関する研究の高度化
研究期間：令和３～７（2021～2025）年度
予算区分：交付金
多摩森林科学園担当者：阿部真・設樂拓人

実施課題1イa1では、森林総合研究所の本支所と多摩森林科学園（以下、科学園）とが、生物多様性の基盤情報として日本の各気候帯における森林生態系の動態情報について解析・収集し、公開を進めてきた。また、森林施業等の人為や環境変動に対する種及び生態系の多様性の応答を解明することを目標にして、これらの基盤情報を活用してきた。令和7年度に科学園は、園内の植物の分布や、再生林の植生の経年的変化について情報を収集し、また、これまでに採取された標本の整理を進めた。またさらに、北茨城市の小川試験地で研究所本所（つくば市）が 1987 年以来継続してきた群集調査に参加して、成熟した天然林の構成と動態に係る情報を蓄積した。

森林総合研究所は戦略課題1イにおいて、森林の生物の生理・生態や生態系の機能及びそれらに対する環境因子の影響について明らかにし、生物多様性のもたらす生態系サービスを持続可能な形で利活用できる森林管理の手法を発展させるとしてきた。科学園における調査・整理の結果は、このための重要な基礎データとなる。

課題番号：１イａＰＦ４７
課 題 名：気候変動で森林群集の種組成はどう変わるのか？：分布予測モデルによる時空間変動予測
研究期間：令和５～８（2023～2026）年度
予算区分：科研費
多摩森林科学園担当者：設樂拓人（代表者）

日本の森林は、特定の植物群落にのみ出現する種群「標徴種」とその組み合わせ（種組成）によって200種類以上の「森林群集」に分類される。森林群集は気候変動が起こった場合に地理分布だけでなく、種組成も変化すると予想される。本研究では、分布予測モデル（SDM）を用いて日本の森林群集の地理分布と種組成変化の時空間変動メカニズムを解明する。そのために、SDM による「森林群集」と「標徴種」の過去・現在・将来の気候条件下における生育可能な地域（潜在分布域）の分布予測を行い、森林群集単位と標徴種単位での分布変化の違いを調べる。

R7年度は、SDM を用いて日本全国約1km メッシュから任意の地点における 45 樹種の気候変化に伴う種組成変化を図化した「種組成変化推定図」を考案した。種組成変化推定図は気候変化に伴う植生変化のパターンを理解し、森林植生のモニタリング、化石情報などとの組み合わせによる古生態学の発展、モデルと現地での生育状況の違いやモデルの概念を体験してもらうなどの教育分野への応用など幅広い分野への貢献に資する資料である。

課題番号：１イ aＰＦ５４
課 題 名：土埋木を用いた木曽ヒノキ林の復元とヒノキ三代の親子鑑定
研究期間：令和６～８（2024～2026）年度
予算区分：科研費
多摩森林科学園担当者：松本麻子

世界的にも貴重な温帯性針葉樹林である木曽地方の国有林を対象に、数百年前の種組成を明らかにし、適切な保全と将来に向けた更新を促すことを目指す課題である。そのために、以下の３つの課題に取り組む。１)組織学的、遺伝学的手法を併用して土埋木の材片から樹種を特定し、人為攪乱前の木曽ヒノキ林の種組成を推定する。２)人為攪乱前と現在の種多様性および遺伝的多様性を比較し、施業による変化を明らかにする。３)親子三世代の関係を解析し、更新に成功したヒノキ個体は特定の親木の組み合わせから生じた優良個体であるという仮説を検証する。

今年度は、列状伐採地である調査地（三浦国有林）において、残存した木曽ヒノキの成木個体および伐採地で生育している実生稚樹（20cm 以上）からサンプルを採取し、DNA を抽出した。PCR 実験によって各 DNA の遺伝子型データを得た。樹種特定の課題では、組織学的な方法では区別が難しいヒノキとサワラについて、葉緑体 DNA の TrnL 遺伝子領域の塩基配列を比較することでこれらの識別が可能であった。一方、土埋木は数百年前に伐採された個体の遺物であることから、DNA 抽出が可能な組織が得られない可能性も高かった。DNA による土埋木の種識別の成功は、いかに DNA 抽出ができる良く保存された組織が得られるかに左右されると考えられた。

課題番号：１イａＰＳ２
課 題 名：都市気候シミュレーションによる都市近郊の森林植生の分布変化の推定
研究期間：令和６～７（2024～2025）年度
予算区分：交付金プロ
多摩森林科学園担当者：設樂拓人（代表者）

本研究では、生物種の生育可能な分布を推定する種分布モデル（SDM）に用いられている気候データ（平年値メッシュ、Chelsa）と都市化の影響を加味した Weather Research and Forecasting（WRF）という気候シミュレーションデータを用いて、SDM で首都圏の都市気候に対する都市近郊林の潜在分布域を推定し、平年値メッシュの結果と比較することで、都市気候シミュレーションデータの有効性および都市気候が森林植生の分布に与える影響を評価する。

R7年度は、10 種類の樹木の種分布モデル（MaxEnt）を構築し、それぞれの気候データに基づく潜在分布域を推定した。その結果、結果、アラカシを除く9種で潜在分布域の面積は WRF で減少した。とくに、ブナやミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の構成樹種の面積はおよそ半分になると推定された。これらの結果は近年頻発する夏季の猛暑・酷暑が長年続くと植生変化（特に冷温帯落葉広葉樹林の減少）につながる可能性があることを示している。今後の課題として、WRF による都市気候を考慮した気候データを拡充させ、より高精度な分布変化の推定を行う必要がある。

課題番号：１イｂ１
課 題 名：生物機能からみた森林の生物多様性に関する研究の高度化
研究期間：令和３～７（2021～2025）年度
予算区分：交付金
多摩森林科学園担当者：加藤珠理

ヤマザクラの遺伝的多様性を評価するため、分布域を網羅するように採集した 146 個体について、23 個の SSR マーカーを用いて遺伝子型を決定した。STRUCTURE 解析により遺伝構造を調べた結果、東日本、近畿、四国に広く見られるクラスター1、九州および中国地方に見られるクラスター2、鹿児島県南端部に局所的に見られるクラスター3の3つの遺伝的集団に分けられた。クラスター3は、ヤマザクラの変種であるツクシヤマザクラに該当した。さらに、デモグラフィー解析によって3クラスター間の分岐過程を推定したところ、クラスター1は約 52,260 年前に、クラスター3は約 19,260 年前に、それぞれクラスター2から分岐した可能性が高いことが示された。すなわち、最初の分岐は最終氷期最盛期（LGM：約 21,000～18,000 年前）より前に、2回目の分岐は LGM の期間中に生じたと考えられる。以上から、現在みられるヤマザクラの遺伝的多様性は、氷期を含む長い時間スケールで形成されたと考えられ、東日本、近畿、四国に広く分布するヤマザクラ（クラスター1）と鹿児島県南端部に局所分布するツクシヤマザクラ（クラスター3）は、九州・中国地方に分布するヤマザクラ（クラスター2）から派生した可能性が示唆された。

課題番号：１イｃ１
課 題 名：森林の生物多様性の保全と持続可能な利用に関する研究の高度化
研究期間：令和３～７（2021～2025）年度
予算区分：交付金
多摩森林科学園担当者：井上大成・中村祥子・林典子

戦略課題1イは森林の生物の生理・生態や生態系の機能及びそれらに対する環境因子の影響を様々な空間スケールで明らかにし、生物多様性のもたらす生態系サービスを持続可能な形で利活用できる森林管理の手法を発展させることを目標としている。

R7年度には、この目標を達成するために、千代田苗畑でチョウ群集の日周変化を調査した。また、森林総研本所（以下、本所;29 年目）、つくば第2樹木園（以下、第2樹木園;8年目）、千代田苗畑（以下、千代田;19 年目）、多摩森林科学園（以下、科学園;18 年目）において通年のチョウ群集の野外調査を実施した。個体数は、千代田と第2樹木園では平年並みであったが、本所では過去2番目、科学園では過去3番目に多かった。種数は、本所では過去最高、第2樹木園では平年並みであったが、千代田と科学園では過去2番目に少なく、共通した傾向は見られなかった。科学園では絶滅危惧 IB 類のツマグロキチョウが5年連続して記録されたが、個体数は減少してきた。科学園で1種新たな種（外来種・ムシャクロツバメシジミ）が追加記録された。また科学園で 2024 年に初めて記録されたイシガケチョウは、2025 年には幼虫・蛹も発生し、定着しつつあると考えられた。外来種ムシャクロツバメシジミが八王子市周辺で広く発生していることが明らかとなったため、その生態調査を緊急に開始した。

課題番号：１イcPF３９
課 題 名：種子食性ショウジョウバエにおける同所・季節的寄主転換の生態・遺伝的背景
研究期間：令和６～９（2024～2027）年度
予算区分：科研費
多摩森林科学園担当者：中村祥子（代表者）

本研究は、複数のスミレ種間で季節的な寄主転換をする種子食性ショウジョウバエ、寄生バチ、スミレの種間相互作用系を利用し、①同所・季節的寄主転換が起こる生態学的なメカニズム解明と、②ショウジョウバエ科における種子食性スペシャリストの歴史的な出現過程の解明を目指す。2025 年度は①に関連し、(1) スミレ種間、季節間における種子の資源量、栄養成分の変動の解明、(2)ハエの地域個体群の遺伝的分化と、スミレ群集組成の地域差の関係解明に向けた全国サンプリングを実施した。
(1)多摩森林科学園における初春から晩秋までの定期調査から、タチツボスミレとニョイスミレの種子生産の季節性を解明した。開放花、閉鎖花ともに生産の開始は、タチツボスミレのほうがニョイスミレより約2週間早かった。閉鎖花の果実数は、両種とも5，6月をピークに7月以降激減した。ハエ幼虫が摂食する未熟種子の果実あたり脂質量は、春（4，5月）はタチツボスミレにおいてニョイスミレより多かったが、7月になると種間差がなくなった。これらより、スミレ種間のフェノロジーや、種子栄養成分の季節性の違いが、ハエの季節的な寄種転換の一因となる可能性を示すことができた。
(2)日本全国 17 か所の調査から、うち 15 か所にて本ハエを採取し、タチツボスミレとニョイスミレ以外の6種のスミレもホストとなることが明らかとなった。また、九州、関東、東北の個体群の遺伝構造解析から、本ショウジョウバエが実は遺伝的に異なる2種から成ることが判明し、両種が同所的に、同種のスミレを利用して共存していることが分かった。

課題番号：２ア a １
課 題 名：造林・育林技術の実証とシーズ創出に向けた研究開発
研究期間：令和３～７（2021～2025）年度
予算区分：交付金
多摩森林科学園担当者： 阿部真・島田和則・岩本宏二郎

本課題は、高度なセンシング技術等の応用により、地域毎に異なる林業・森林管理における諸課題に対応した造林・育林作業の低コスト化・省力化に資する新技術の開発を行うことを目的とする。今年度は以下の調査を行った。
コナラが優占する雑木林の再生を目的に、落葉広葉樹二次林に設定した皆伐試験区において、皆伐更新による目的樹種の生育に与える効果を検討するため、毎年継続的に毎木調査を行っている。皆伐4年目および皆伐2年目の2地点における樹種組成と萌芽の伸長について検討したところ、伐採前の樹種組成や、伐採直後の動物による食害程度の違いにより、更新木の組成や成長量に差異が見られた。これより、目標とするコナラを主体とする落葉広葉樹林を成立させるためには、状況をみながら稚樹の植栽や萌芽枝の食害防止策などが必要となることが示唆された。

課題番号：２アａＰＦ１５
課 題 名：効果的な花粉発生源対策の実施に向けた調査及び普及
研究期間：令和５～７（2023～2025）年度
予算区分：政府等受託
多摩森林科学園担当者： 阿部真

スギ・ヒノキ等の花粉によるアレルギー性疾患が深刻な社会問題となった中、森林総合研究所は全国林業改良普及協会（以下、全林協）と共に、林野庁が進めるスギ等の花粉発生源対策事業に基づく調査研究を行っている。令和7年度に多摩森林科学園では、園内と近隣の西多摩地域におけるスギ雄花の着花状況調査を行った。また、全林協及び東京都健康安全研究センターが経年的に実施する西多摩地域の着花状況調査に参加し、これらの結果を参照・統合して、着花量の年変動パターンからこれに影響する林分環境について抽出する手法を検討した。また、森林総合研究所本所（つくば市）と共に茨城県内の着花状況調査を行った。さらにまた、研究所本所が千葉県富津市に設定した試験区と、関西支所（京都市）が京都市伏見区に設定した試験区とで、スギの着花特性を解明するための調査を行った。これらの調査・解析の結果は林野庁や自治体に共有されて、スギ等人工林の管理や育成にかかる施策の重要な基礎となった。

課題番号：２アｃ１
課 題 名：持続的な林業経営および森林空間利用のための評価・計画・管理技術の開発
研究期間：令和３～７（2021～2025）年度
予算区分：交付金
多摩森林科学園担当者：井上真理子

持続的な森林の利用を図るため、森林管理を担う専門的人材の育成に貢献する高等学校向けの教育プログラムの開発を行った。林業分野では林業イノベーションの推進が図られており、デジタル技術など技術革新が進められている。新しいニーズに対応した教育内容として、高等学校の専門科目「森林経営」を対象に、地上レーザー測量を用いた森林計測技術を学ぶ授業案を開発し、授業実践による検証を行った。教育プログラムは、「学習指導要領」（文部科学省）に基づいて、単元「森林の測定」の内容を発展させた構成とし、教科書に沿って立木の測り方と林分調査の方法を学んだ上で、新しい技術について比べながら理解できるものとし、教示用の教材も作成した。高等学校での授業を実践して実用性を検証し、その上で、高校教員に教材を提供し、実際に授業を行えるかを確認した。

加えて、森林計画について体験的に学ぶゾーニングゲームの開発も行った。森林・林業の専門教育の教育プログラム開発の研究は、専門分野の人材育成に貢献する。

課題番号：２ア ｃ ＰＦ２６
課 題 名：身近な森林を題材に環境を学ぶ学習プログラムの開発－専門教育と普通教育とをつなぐ
研究期間：令和７～10（2025～2028）年度
予算区分：科研費
多摩森林科学園担当者：井上真理子（代表者）・平野悠一郎

環境教育の推進に重要な持続可能な社会について学校教育でも学べるようにするために、“森林”を題材に取り上げ、森林科学の専門教育の知見を活かした学習プログラムを開発することを目的とした。今年度は、森林科学の専門教育の実態を調査した。大学での森林科学の専門教育は、明治期から森林官吏の養成を目的に始まっており、産業界の発展と共に拡大した。昭和前期には、林学科（林科）が 19 校にあり、学生数は約 400 人/年だった。戦後に教育制度が変わり、新制大学で林学科を設置する大学は 25 校に増え、林産学科も設置され、学生数は 1、200 人/年まで増えた（1970 年代）。平成期前後の教育改革から学科改組が進み、林学科は森林科学科や、森林科学のコースを設置する学科など、多様な教育課程に変わっていった。森林科学の分野を広く学ぶ学生数は、約 800 人/年と推定された。

また高等学校では、70 校で森林・林業の教育が行われており、林業科や森林科学科などの専門学科や、森林のコース、選択科目で森林関連科目を設ける学校まで多様な教育課程となっていた。教育内容は、国土保全や生物多様性も含み、地域の環境の学習や体験型の活動として重視されていた。

課題番号：２ア ｃ ＰＳ２
課 題 名：無関心層を取り込んだ森林空間利用促進のためのアウトリーチ手法の提案
研究期間：令和５～７（2023～2025）年度
予算区分：交付金
多摩森林科学園担当者：井上真理子・平野悠一郎

持続的な森林空間の利用を促進するために、森林教育の多様な実践事例を調査し、成果について『森林サービス産業白書』（日本林業調査会、2026 年）として刊行した。

所有地の森林を活かして、林業家が森林教育を取り組んでいる優良事例があった。秋田県では、幼児や小学校などを対象に「健康の森」で森林体験を 35 年にわたりって導していた。岩手県では、視覚障害者向けの森林体験活動を企画し、取り組みを 10 年間毎月実施されていた。また三重県では、高校生への林業体験を指導するとともに、森林体験の指導者の養成に取り組んでいた。

森林・林業以外でも、教育関係の分野で森林体験活動の取り組みがあった。自然を活かした保育活動「森のようちえん」（鳥取県など）、高等学校（普通科）の学校林での生徒による森林づくり活動（北海道）、社会教育施設（青少年の家）での自然豊かな環境を活かした森林体験学習（富山県、奈良県ほか）、美術館で木のおもちゃを活用した木育活動（東京都ほか）があった。

『森林サービス産業白書』では、教育の他に観光や健康に関わる活用事例と、多摩森林科学園での樹木園と展示館を公開している事例も含めて、森林サービスについての体系的な整理を行った。

課題番号：２アｄ１
課 題 名：多様化する森林との関わりを支える社会経済的・政策的方策の提示
研究期間：令和３～７（2021～2025）年度
予算区分：交付金
多摩森林科学園担当者：平野悠一郎

本課題は、多様化する森林と社会との関わりを支え、持続可能な開発目標（SDGs）に貢献するため、林業経営、地域社会、木材産業等の発展に寄与する社会経済的・政策的方策等を提示することを目的としている。

R7年度は、生物多様性維持・保全の試みやネイチャーポジティブとしての自然・森林への社会的関心が、林業経営の発展にいかに寄与しうるかとの観点に基づく研究を進めた。特に、林業経済学という枠組みに照らして過去の研究の体系的レビューを行った結果、この 20 数年間を通じて、森林経営や林業発展における「自然保護」の意味づけが非常に高まってきたこと、その中でも生物多様性維持・保全に寄与するとの文脈から、ボランティアや企業投資の受け皿としてみなされつつあったこと等が明らかとなった。

課題番号：２アｄＰＦ１３
課 題 名：科学的林業の受容と変容に関する国際比較研究：現場森林官が持つ仕事観に着目して
研究期間：令和４～７（2022～2025）年度
予算区分：科研費
多摩森林科学園担当者：平野悠一郎

本課題は、森林の管理を実際に担う現場森林官が持つ価値観や仕事観を、歴史的展開が交差しつつも異なる展開をみせてきたドイツ、アメリカ、日本等を対象とした共通フォーマットによるアンケート調査によって、その相違や共通性を実証的に解明することを目的としている。

R7年度は、アメリカの現場森林官の役割と仕事観についてのアンケート調査を実施し、その結果を報告・論考として整理した。アメリカの現場森林官は、各種の立場に応じた異なる役割に従事しているものの、総じて科学的な知見を重視しつつ、地域の人々の知見や関心、森林での実験・観察等に基づく知見にも重きを置く傾向が見られており、また、充実感やプライドをもって自らの専門的な業務に従事する傾向にあった。

課題番号：２イａ１
課 題 名：樹木・林業病害の実効的制御技術の開発
研究期間：令和３～７（2021～2025）年度
予算区分：交付金
多摩森林科学園担当者：長谷川絵里

本課題では、森林や林業に被害を生じる樹木の材質劣化や枯死・衰退などに関する重要病害

の早期診断法や被害軽減に向けた実効的な技術を開発する。

サクラ類ふくろ実病は、子のう菌 *Taphrina* 属菌がサクラ類に寄生して起きる形態形成異常を伴う病害のひとつであり、異常に膨らんだ果実の中で種子が退化して空洞となる。日本ではこれまで *Cerasus* 属のミヤマザクラと *Padus* 属のシウリザクラ・ウワミズザクラで報告されており、それぞれ別種の菌（前者は *T. truncicola*，後者は *T. farlowii*）の寄生によるとされている。*Cerasus* 属のクマノザクラふくろ実病の罹病樹から菌の分離を試み、数系統の菌株を得た。分離菌株の種の同定と近縁種との類縁関係の解析、および生態の解明が課題である。

課題番号：２イａＰＦ６１
課 題 名：日本と木材輸出相手国の樹木を外来病害虫から護る複合リスク緩和手法の開発
研究期間：令和６～10（2024～2028）年度
予算区分：政府等受託
多摩森林科学園担当者：平野悠一郎

本課題は、木材生産のシステムズアプローチマニュアルを活用した林業経営者と素材生産者の増加により、外来病害虫対策として燻蒸に用いられている臭化メチル利用量を毎年削減しながら、日本からの木材輸出量を政府目標まで増加させること等を目的としている。

R7年度は、システムズアプローチの実践に向けて、既に二国間での取り組みを進めているカナダの実態調査を行い、日本での適用可能性について検討した。その結果、カナダでは、1990 年代以降のシステムズアプローチ展開に際して、既存の製材グレード認証システムを応用する形で、製材加工段階以降の病虫害対策の仕組みづくりがスムーズに進められてきたことが明らかになった。また、カナダでは、重要産業である木材生産・輸出を大きく阻害しうる森林病虫害の発生に対して、多くの予算・人員を伴う充実したシステム構築が行われており、それが森林経営・伐採・搬出段階でのシステムズアプローチ実施を担保していたことも分かった。

課題番号：２イａＰＦ６３
課 題 名：令和７年度高度な森林鳥獣被害防除手法の標準化推進事業
研究期間：令和６～７（2024～2025）年度
予算区分：政府等受託
多摩森林科学園担当者：岡輝樹（代表者）

本研究は、再造林地におけるシカ防護柵の設計および維持管理を、個別技術の改善ではなく「判断体系」として再構成することを目的に実施した。既設柵の点検・補修および地形判読（CS 立体図等）を通じ、損壊が集中する地形条件や部位の傾向を整理し、設計段階でのリスク回避と維持管理段階での重点確認を連動させる枠組みを構築した。さらに、区画分割（ブロック化）による被害の局所化を、限られた予算条件下で合理性

を最大化する設計思想として位置づけ、その適用条件と課題を検討した。あわせて、スマートフォンアプリ（QField）を用いた点検記録の試行により、空間情報と維持管理データを統合する管理手法の可能性を検証した。

成果は「設計編」「維持管理編」として体系化するとともに、QField 運用マニュアルを作成した。さらに徳島県、山口県、香川県において行政担当者、林業事業体、現場技能者を対象とした研修会を開催し、設計・制度・現場を横断して説明可能な共通基盤の形成を図った。これらの取組は、技術の社会実装に向けた初期段階として位置づけられる。本年度は、防護柵を施工物としてではなく、設計・施工・点検・修繕が循環する管理インフラとして再定義し、その実装基盤を整備した段階にある。

課題番号：２イａＰＳ１４
課題名：　樹木の倒伏リスク診断技術の開発
研究期間：令和７～９（2025～2027）年度
予算区分：交付金プロ
多摩森林科学園担当者：長谷川絵里

本課題では樹木の倒伏リスク診断研究のフローを確立するとともに、各地の腐朽害のうち今後詳細な研究が必要な腐朽害を抽出する。そのために、本支所内植栽木を中心とする倒伏危険木を用いて、原因菌の特定、非破壊的診断、破壊を含む実証試験、および伐倒後の解体調査を行い、その結果を紐づける。これにより、調査項目、調査手順等の調整・改善を行う。

多摩森林科学園（以下科学園）では、構内・実験林内において、樹木の外観診断（子実体、傷など）及び各種診断機器により腐朽診断を行い、実証試験や倒木の解体結果をフィードバックさる。サクラ保存林内のサクラについて、実地調査を行いながら外見診断の方法を検討した。その過程でクビアカツヤカミキリのものと疑われるフラスを発見し、科学園内でクビアカツヤカミキリの被害状況を調査するきっかけとなった。

令和７年度 研究発表業績一覧

１．原著論文

表　　題	著 者 名	誌　　名	巻号頁	発 行
Propagation of Hinoki Cypress (Chamaecyparis obtusa) Through Tissue Culture Technique as a Sustainable Method for Mass Cloning of Selected Trees.(組織培養技術による選抜されたヒノキ(Chamaecyparis obtusa)樹木の持続的な大量クローン増殖)	Tsuyoshi E. Maruyama(丸山 E.毅)、Momi Tsuruta(鶴田燃海)、Asako Matsumoto(松本麻子)、Ryouichi Kusano(草野僚一・熊本県林業研究・研修センター)、Tetuji Hakamata(袴田哲司・静岡県森林・林業研究センター)	Sustainability 2025	17(7):3039、https://doi.org/10.3390/su17073039	2025.03.
ルーミスシジミの発育零点と有効積算温度	井上大成	蝶と蛾	76(2):67-73	2025.04.
Unveiling Key Factors Shaping Forest Interest and Visits: Toward Effective Strategies for Sustainable Forest Use	Kimisato ODA、Kazushige Yamaki、Asako Miyamoto、Keita Otsuka、Shoma Jingu、Yuichiro Hirano、Mariko Inoue、Toshiya Matsuura、Kazuhiko Saito、Norimasa Takayama	Forests	16(5):714、https://doi.org/10.3390/f16050714	2025.04.
Classification of diverse pear genetic resources using a combination of MIG-seq and whole-genome sequencing	Sogo Nishio、Norio Takada、Yukie Takeuchi、Shuri Kato、Hiroyuki Iketani	Horticultural Plant Journal	https://doi.org/10.1016/j.hpj.2025.03.003	2025.05.
Climate-driven niche dynamics of endangered Castanopsis argentea and C. tungurrut in Indonesia	Agung Hasan Lukman、Takuto Shitara、Takaki Aihara、M. Fajrin Hidayat、Wiryono、Cindy Q. Tang、Takashi Kamijo、Tetsuya Matsui	Plant Ecology	226(9-10):1037-1056、https://doi.org/10.1007/s11258-025-01550-w	2025.07.
Comparison of genetic and phenotypic variations in disjunct populations of highly polyploid Betula davurica in the Japanese Archipelago with continental populations in a region of northeast Asia	Teruyoshi Nagamitsu、Vyacheslav Yu Barkalov、Kentaro Uchiyama、Kyoko Sugai、Chiaki Otsu、Takuto Shitara	Plant Species Biology	40(5):439-451、https://doi.org/10.1111/1442-1984.70019	2025.07.
Differential admixture and introgression in Cerasus hybrid zones at the south rear edge of cool-temperate C. sargentii and the north leading edge of temperate C. leveilleana	Teruyoshi Nagamitsu、Kahoko Tochigi、Shuri Kato	Plant Species Biology	41(1):e70026、https://doi.org/10.1111/1442-1984.70026	2025.08.
放置林における人工ギャップ形成による植物種構成への影響ー人工ギャップ形成後 10 年間の経年変化から	島田和則、岩本宏二郎、大中みちる、長谷川絵里、阿部真、設樂拓人、九島宏道、勝木俊雄	森林立地	67(2):35-42	2025.12.

表　　題	著　者　名	誌　　名	巻号頁	発 行
家庭科教育のためのフローリングの簡易な性能試験の開発	東原貴志、佐藤ゆかり、佐藤正直、村田功ニ、児嶋美穂、井上真理子、保坂路人、石黒成紀、伊藤圭	木材学会誌	72(1):14-20	2026.01.
Large ungulates will be present in most of Japan by 2050 owing to natural expansion and human population shrinkage	Takahiro Morosawa、Hayato Iijima、Tomonori Kawamoto、Takahisa Kanno、Ryota Araki、Teruki Oka	Scientific Reports	16(1):7550、https://doi.org/10.1038/s41598-026-38177-4	2026.02.
林業経済学における自然保護をめぐる研究の歩み：多様な価値と制度構築	柴崎茂光、平野悠一郎	林業経済研究	72(1):14-27	2026.03.

2．総説

表　　題	著　者　名	誌　　名	巻号頁	発 行
日本の動物園における過去のリス科動物の飼育記録の分析と外来リス類のリスク管理	安田雅俊、田村典子	哺乳類科学	65(2):111-128、https://doi.org/10.11238/mammalianscience.65.111	2025.08.

3．短報

表　　題	著　者　名	誌　　名	巻号頁	発 行
関東地方産ウラギンシジミの幼虫の頭幅	井上大成	蝶と蛾	76(4):175-177	2025.10.

4．公刊図書

表　　題	著　者　名	誌　　名	巻号頁	発 行
コラム：林学の歴史をたどる	平野悠一郎	林業遺産へ行こう(柴崎茂光編著、文一総合出版、256 頁)	84-85	2025.04.
II コラムC　地域・資源再生を担う新たな森林利用	平野悠一郎	シリーズ環境社会学講座 4：答えのない人と自然のあいだ(福永真弓・松村正治編、新泉社、320 頁)	194-198	2025.05.
〈驚き(ワンダー)〉を呼び込む自然体験学習	関礼子(立教大学)、井上真理子、太田和彦(南山大学)	昭和堂、224 頁		2025.06.
武蔵野	島田和則	図説 日本の里山(朝倉書店、184 頁)	62-63	2025.06.
となりのクリハラリス	田村典子	東京大学出版会、192 頁		2025.08.

表　　題	著　者　名	誌　　名	巻号頁	発 行
総論 9. 野生動物の分布拡大とその要因	岡輝樹、飯島勇人、諸澤崇裕	野生動物の保全と管理の事典(「野生生物と社会」学会(編) 、朝倉書店、461 頁)	115-127	2025.10.
11. 日本の哺乳類の現状と課題　齧歯目：リス科	田村典子	哺乳類学の百科事典(丸善出版、548 頁)	458-459	2025.11.
第 4 部 6 章　森に依存するリス類が森に害を与えるとき	田村典子	樹木医学講座 2－樹木の生物被害－(海青社、484 頁)	383-396	2026.01.
森林サービス産業白書	泉桂子、井上真理子、大石康彦、大塚啓太、岡裕泰、小田龍聖、齋藤暖生、神宮翔真、高山範理、土屋俊幸、林雅秀、平野悠一郎、平原俊、松浦俊也、矢島万理、八巻一成、山下直子(五十音順で記載)	日本林業調査会、398 頁		2026.03.

５．学会講演要旨

表　　題	著　者　名	誌　　名	巻号頁	発 行
森林総合研究所多摩森林科学園における森林教育の取り組み	井上真理子、大石康彦	日本野外教育学会大会プログラム・研究発表抄録集	28:72(R-3)	2025.06.
ダケカンバに似て非なるチョウセンミネバリの生態を探る	設樂拓人	長野県植物研究会大会講演要旨集(2025)	1(特別講演①)	2025.06.
SDM-informed field survey identifies new localities and novel morphological note for endangered Castanopsis argentea in Java, Indonesia(SDM に基づく現地調査によるインドネシア・ジャワ島における絶滅危惧種 Castanopsis argentea の新産地と新たな形態学的特徴の同定)	Agung Hasan Lukman、Alnus Meinata、Firman Hadi、Karyadi Baskoro、Arief Hamidi、Indra Fardhani、Fatchur Rohman、Takuto Shitara、Takashi Kamijo、Tetsuya Matsui	日本熱帯生態学会年次大会(The Japan Society of Tropical Ecology)	35:P04	2025.06.
Formation process of disjunct distribution of Betula costata in the Japanese Archipelago using species distribution modeling	Takuto Shitara、Takaki Aihara、Arata Momohara、Ikutaro Tsuyama、Tetsuya Matsui	International Association for Vegetation Science 2025 Annual Meeting	Poster Session	2025.07.
高等学校農業教育における森林・林業の教育内容の構成の提案	井上真理子	日本農業教育学会大会公開シンポジウム・総会・研究発表会	83:口頭発表 2(No.17)	2025.08.
森林の訪問・体感利用の可能性と課題	平野悠一郎	中日本入会林野研究会大会	45:基調報告 1	2025.09.

表　　題	著 者 名	誌　　名	巻号頁	発 行
Integrating predictive distribution models and local knowledge in field surveys of Castanopsis argentea in Java, Indonesia(インドネシア・ジャワ島における Castanopsis argentea の現地調査における分布予測モデルと地域知見の統合)	Agung Hasan Lukman、Alnus Meinata、Firman Hadi、Karyadi Baskoro、Fatchur Rohman、Indra Fardhani、Arief Hamidi、Takuto Shitara、Takashi Kamijo、Tetsuya Matsui	植生学会大会講演要旨集	30:56(P09)	2025.10.
日本のチョウセンミネバリ Betula costata と大陸個体の系統関係と遺伝情報から推定されるその遺存プロセス	相原隆貴、設樂拓人、内山憲太郎、NianWang、津村義彦	植生学会大会講演要旨集	30:27(A06)	2025.10.
種組成変化推定図の考案と植生学への利活用	設樂拓人、津山幾太郎、百原新、相原隆貴、山下慎吾、則行雅臣、染矢貴、松井哲哉	植生学会大会講演要旨集	30:45(B12)	2025.10.
隔離分布するヤエガワカンバ林の植生地理的特性とその形成史：植物社会学・種分布モデル・分子系統地理学による統合考察	設樂拓人	植生学会大会講演要旨集	30:19(シンポジウム No.4)	2025.10.
18 歳までの自然体験はその後の自然への愛着心を育むか？	大塚啓太、小田龍聖、高山範理、井上真理子、宮本麻子、八巻一成	日本環境教育学会年次大会(北海道)大会内容・プログラム	36:76(36A04)	2025.10.
47 都道府県のチョウを使ったカードゲームの制作	江田慧子、井上大成、江田信豊	日本鱗翅学会大会プログラム・講演要旨集	71:A209	2025.10.
シジミチョウ科幼虫の頭幅(予報)	井上大成	日本鱗翅学会大会プログラム・講演要旨集	71:A208	2025.10.
ブナ林細根資源動態の個体レベル解析：分子マーカーによる個体識別を活用して	韓慶民、松本麻子、辻井悠希、壁谷大介、宮澤真一、野口享太郎	根研究集会要旨集	62:P26	2025.11.
種組成変化推定図による最終氷期最寒冷期の植生復元と大型植物遺体情報に基づく検証	設樂拓人、百原新、津山幾太郎、相原隆貴、松井哲哉	日本植生史学会大会	40:O-02	2025.11.
現場フォレスターが持つ知識に対する認識の日米比較	平野悠一郎、石崎涼子	林業経済学会秋季大会発表要旨集(2025)	A10	2025.11.
同所的に生育するスミレ 2 種の繁殖特性比較	中村祥子、安田和真	種生物学シンポジウム要旨集	57:P-60	2025.12.
SSR マーカーを用いた角館のシダレザクラの遺伝的特徴	佐々木暖日、板橋朋洋、加藤珠理、木村恵	日本生態学会東北地区会大会講演要旨集	70:講演番号 30	2025.12.
スミレ類の種子を食害するショウジョウバエ	末吉昌宏、中村祥子、設樂拓人、井上真紀、栗林大晟	日本生態学会大会講演要旨	73:P2-138	2026.03.
防鹿柵による林業被害軽減の現状と課題	垂水亜紀、米田令仁、岡輝樹、大谷達也	日本森林学会大会講演要旨集	137:135(A-21)	2026.03.

表　　題	著　者　名	誌　　名	巻号頁	発 行
森林総合研究所における最新の植物相と管理状況	設樂拓人、小山明日香、柴田銃江、大橋春香、松井哲哉、小黒芳生、藤本悠太郎、櫃間岳、中静透、八木橋勉	日本生態学会大会講演要旨	73:P2-039	2026.03.
セイヨウミツバチと野生訪花昆虫類によるナシの花の微生物群集の変化	中村祥子、滝久智、外山晶敏	日本応用動物昆虫学会大会講演要旨集	70:PG-13	2026.03.
近代以降の林学教育の広がりと森林科学への転換	井上真理子、平野悠一郎、大石康彦	日本森林学会大会講演要旨集	137:210(PC-1)	2026.03.
植物生態・保全に対する種組成変化推定図の利活用の検討	設樂拓人、百原新、津山幾太郎、相原隆貴、松井哲哉	日本植物分類学会	25:PB61	2026.03.
総合学・原論としての森林科学の射程と可能性	平野悠一郎	日本森林学会大会講演要旨集	137:119(T4-1)	2026.03.
都市・都市近郊・地方域住民の森林への関心、訪問頻度に関する比較	小田龍聖、八巻一成、宮本麻子、大塚啓太、神宮翔真、平野悠一郎、井上真理子、松浦俊也、齋藤和彦、高山範理	日本森林学会大会講演要旨集	137:141(B-15)	2026.03.
鳥の鳴き声学習 Web ツールの開発と評価：種判別能力と意識は変化する？	小川結衣、深澤圭太、吉岡明良、熊田那央、竹中明夫、井上真理子、神宮翔真	日本森林学会大会講演要旨集	137:144(C-6)	2026.03.
秋田県内に保存されているシダレザクラの遺伝的特徴	木村恵、佐々木暖日、板橋朋洋、加藤珠理	日本森林学会大会講演要旨集	137:247(PF-25)	2026.03.
木工競技大会の作業工程分析を踏まえた木工題材の提案	中村昂資、東原貴志、井上真理子	日本木材学会大会研究発表要旨集	76:R16-01-0930	2026.03.
目視観測に基づくスギの雄花量と林分環境('25)	阿部真、倉本惠生、中尾勝洋、稲垣善之、瀧誠志郎	日本森林学会大会講演要旨集	137:265(PI-19)	2026.03.
ニホンジカから植栽稚樹を防護する資材の効果に影響する要因	飯島勇人、岡輝樹	日本森林学会大会講演要旨集	137:294(PL-15)	2026.03.

6．その他

表　　題	著　者　名	誌　　名	巻号頁	発 行
十和田・八甲田地域における、1930 年代と 2010 年代の 2 時期の植生図比較	設樂拓人、黒川紘子、小黒芳生、佐々木雄大、大橋春香、新山馨、柴田銃江、松井哲哉	東北大学植物園利用研究成果要旨集(2024 年度)	:16-19	2025.03.
2021～2022 年度の群集属性検討成果とその公開－群集属性マトリックスの解説と今後の方向性－	鈴木伸一、設樂拓人、鐵慎太郎、中村幸人、浜田拓、松井哲哉	植生学会ホームページ	https://shokusei.jp/baser/PlantAssociation/Attributes	2025.05.

表　　題	著　者　名	誌　　名	巻号頁	発 行
チョウセンミネバリ(カバノキ科)を埼玉県奥秩父に記録する	設樂拓人、相原隆貴	植物地理・分類研究 (The Journal of Phytogeography and Taxonomy)	73(1):63-66、https://doi.org/10.18942/chiribunrui.0731-08	2025.05.
八王子市におけるイシガケチョウの記録	井上大成	うすばしろ	75:26	2025.05.
Detection of De Novo Mutations by Sequencing Reduced Representation Libraries.	Saneyoshi Ueno、Yoichi Hasegawa、Shuri Kato、Kentaro Uchiyama、Shingo Kaneko	Methods in molecular biology (Clifton, N.J.)	2933:99-111、https://doi.org/10.1007/978-1-0716-4574-1_14	2025.05.
民有林林道の厳しい維持管理実態とそれを克服するための方策	笹田敬太郎、鹿又秀聡、横田康裕、御田成顕、宗岡寛子、久保山裕史、平野悠一郎、都築伸行	森林総合研究所研究成果選集 2025(令和 7 年版)	24-25	2025.06.
十和田・八甲田の森はどう変わったのか？～80 年間の植生変化を探る～	松井哲哉、柴田銃江、小黒芳生、大橋春香、設樂拓人、佐々木雄大、黒川紘子	森林総合研究所研究成果選集 2025(令和 7 年版)	8-9	2025.06.
東京 23 区の住民で過去 1 年間に森林を訪れたのは 3 人に 1 人－森林空間利用を促すには－	小田龍聖、高山範理、宮本麻子、大塚啓太、神宮翔真、八巻一成、平野悠一郎、井上真理子、松浦俊也、齋藤和彦	森林総合研究所研究成果選集 2025(令和 7 年版)	22-23	2025.06.
ブックス(書評)：『森林と時間：森をめぐる地域の社会史』	平野悠一郎	森林科学	104:42-43	2025.06.
八王子市におけるイシガケチョウ越冬後成虫の記録と第 1 世代の発生	井上大成	うすばしろ	76:19-20	2025.07.
八王子市におけるムシャクロツバメシジミの記録	井上大成	うすばしろ	76:23-24	2025.07.
日本森林学会大会企画シンポジウム報告「「森林サービス産業」の発展には何が必要か？」	大塚啓太、平野悠一郎、高山範理、八巻一成	森林技術	1001:30-33	2025.09.
図書紹介　これからの森林学入門	井上真理子	山林	1697:45	2025.10.
記録　日本森林学会公開講演会報告「人文科学から森林科学へのアプローチ－”妖怪”が棲みそうな森林から」	井上真理子	森林科学	105:27-29	2025.10.
巻頭言　森林教育が拓く森林科学の未来	井上真理子	森林科学	105:1-3	2025.10.
森林科学の専門教育の”今”－大学、大学校、高等学校での専門教育	井上真理子	森林科学	105:19	2025.10.

表　　題	著 者 名	誌　　名	巻号頁	発 行
身近な森林から生物多様性を学ぶ	設樂拓人	森林科学	105:16-18	2025.10.
コメント要旨(林業経済学会 2025 年春季大会シンポジウム 持続的な自然資本管理に向けて多様化する取り組み)	平野悠一郎、庄子康	林業経済	78(7):2-3	2025.10.
『現代中国森林政策研究』と今後の展望・課題	平野悠一郎	山林	1698:2-10	2025.11.
最終氷期最寒冷期以降の森林植生における種組成変化推定図の考案：日本百名山の山頂付近の事例	設樂拓人、津山幾太郎、百原新、相原隆貴、山下慎吾、則行雅臣、染矢貴、松井哲哉	森林総合研究所研究報告	24(4):289-302、https://doi.org/10.20756/ffpri.24.4_289	2025.12.

研　究　協　力

１．受託研修

所　　属	氏　　名	期　間	課　　題	受入研究室等
該当なし				

２．受託出張

所　　属	氏　　名	期　間	業　務　内　容	依頼・委託者
園長	松本　麻子	7.4.9	令和 6 年度学会活動にかかる監事監査の実施	日本森林学会
業務課	山田　茂樹	7.4.17	「山林」誌編集委員会への出席	大日本山林会
チーム長（都市近郊林管理担当)	島田　和則	7.4.23	特別緑地保全地区「青梅の森」第１回運営協議会出席	青梅市
園長	松本　麻子	7.4.23	日本森林学会 2025 年度第 1 回理事会参加	日本森林学会
教育的資源研究グループ	井上　真理子	7.4.23	日本森林学会 2025 年度第 1 回理事会参加	日本森林学会
教育的資源研究グループ	井上真理子	7.4.24	2025 年度新潟大学佐渡演習林教育関係共同利用拠点運営委員会参加	新潟大学佐渡自然共生科学センター
業務課	山田　茂樹	7.5.12	令和７年度森林プランナー育成対策第 1 回企画運営委員会	全国森林組合連合会
業務課	山田　茂樹	7.5.13	「山林」誌編集委員会への出席	大日本山林会
チーム長（地域生態系保全担当）	阿部　真	7.5.15	試験関係業務	林野庁
主任研究員	岡　輝樹	7.5.15	試験関係業務	林野庁
教育的資源研究グループ	岩本宏二郎	7.5.15	試験関係業務	林野庁
主任研究員	岡　輝樹	7.5.28	令和７年度東京都シカ管理計画検討会第 1 回専門部会出席	東京都環境局
教育的資源研究グループ	設樂　拓人	7.5.28	令和７年度東京都シカ管理計画検討会第 1 回専門部会出席	東京都環境局

園長	松本　麻子	7.5.28	日本森林学会 2025 年度第 2 回理事会、2025 年定時総会参加	日本森林学会
教育的資源研究グループ	井上　真理子	7.5.28	日本森林学会 2025 年度第 2 回理事会、2025 年定時総会参加	日本森林学会
教育的資源研究グループ	平野　悠一郎	7.6.5	農林水産祭シンポジウム参加	日本農林漁業振興会
教育的資源研究グループ	井上　真理子	7.6.11～6.12	「森林サービス産業」推進事業の調査のため秋田県林業研究研修センター、秋田県森林学習交流館を訪問	林業経済研究所
教育的資源研究グループ	井上　真理子	7.6.17～6.18	「森林サービス産業」推進事業の調査のため智頭の森こそだち舎（智頭町大屋）を訪問	林業経済研究所
業務課	山田　茂樹	7.6.17	「山林」誌編集委員会への出席	大日本山林会
主任研究員	岡　輝樹	7.6.17	令和７年度森林生態系多様性基礎調査における精度検証調査（第６期）及び令和７年度森林資源調査データ解析（第６期）第１回委員会出席	日本森林技術協会
教育的資源研究グループ	平野　悠一郎	7.6.18～6.21	「森林サービス産業」推進事業による現地調査(静岡県沼津市、鳥取県雲南市)	林業経済研究所
教育的資源研究グループ	井上　真理子	7.6.25	「森林サービス産業」推進事業のため、第１回調査委員会参加	林業経済研究所
教育的資源研究グループ	平野　悠一郎	7.6.25	「森林サービス産業」推進事業調査委員会出席	林業経済研究所
主任研究員	岡　輝樹	7.6.25	第 33 回東京都シカ管理計画検討会	東京都環境局
主任研究員	岡　輝樹	7.6.30	令和７年度広葉樹林化加速化検討チーム第 1 回会議出席	岐阜県林政部
教育的資源研究グループ	設樂　拓人	7.7.2	2025 植生図検討会（第１回合同開催）参加	環境省自然環境局
業務課	山田　茂樹	6.8.26～8.29	「山林」誌編集委員会への出席	大日本山林会
業務課	林　典子	7.8.9	勉強会の講師	日本野鳥の会
教育的資源研究グループ	平野　悠一郎	7.8.9 ～8.10	「森林サービス産業」推進事業による現地調査(福島県田村郡小野町)	林業経済研究所

教育的資源研究グループ	中村　祥子	7.8.16～8.17	つくばSCIENCE DAYの講師	つくば市
教育的資源研究グループ	井上　真理子	7.8.22	「森林サービス産業」個別調査のため東京おもちゃ美術館で聞き取り	林業経済研究所
教育的資源研究グループ	平野　悠一郎	7.8.22	「森林サービス産業」個別調査のため東京おもちゃ美術館で聞き取り	林業経済研究所
教育的資源研究グループ	設樂　拓人	7.8.29	令和７年度「東京都における保護上重要な野生動物種(伊豆諸島)」改定第１回維管束植物分科会出席	東京都環境局
教育的資源研究グループ	平野　悠一郎	7.9.4	森林・林業基本計画の変更に向けた意見交換会出席	林野庁
教育的資源研究グループ	平野　悠一郎	7.9.8 ～9.9	講義「住民向け広報・教育Ⅰ」の実施	奈良県フォレスターアカデミー
業務課	山田　茂樹	7.9.16	「山林」誌編集委員会への出席	大日本山林会
園長	松本　麻子	7.9.17	日本森林学会2025年度第3回理事会	日本森林学会
教育的資源研究グループ	井上　真理子	7.9.17	日本森林学会2025年度第3回理事会	日本森林学会
教育的資源研究グループ	平野　悠一郎	7.9.23～9.24	講義「住民向け広報・教育Ⅰ」の実施	奈良県フォレスターアカデミー
教育的資源研究グループ	井上　真理子	7.9.24	森生物多様性読本編集委員会参加	大日本山林
主任研究員	岡　輝樹	7.9.30	令和７年度広葉樹林化加速化検討チーム第２回会議出席	岐阜県林政部
業務課	林　典子	7.10.3	特定外来生物キタリスの生態調査、指導（狭山丘陵）	環境省関東地方環境事務所
教育的資源研究グループ	井上　真理子	7.10.9	「森林サービス産業」推進事業調査委員会参加	林業経済研究所
教育的資源研究グループ	平野　悠一郎	7.10.9	「森林サービス産業」推進事業調査委員会参加	林業経済研究所
業務課	山田　茂樹	7.10.14	「山林」誌編集委員会への出席	大日本山林会
教育的資源研究グループ	平野　悠一郎	7.10.14～10.15	生態系サービス保全利用演習「生態系サービスとしての森林の空間利用をめぐって」の講師	東北農林専門職大学
主任研究員	岡　輝樹	7.10.15	令和７年度森林保護管理(獣害)研修講師	林野庁森林技術総合研修所

教育的資源研究グループ	中村　祥子	7.10.17 ～10.18	美幌博物館講座「スミレと生きるショウジョウバエのふしぎ」の講師	美幌博物館
主任研究員	岡　輝樹	7.11.10	試験関係業務	林野庁
主任研究員	岡　輝樹	7.11.17	試験関係業務	林野庁
主任研究員	岡　輝樹	7.11.18	試験関係業務	林野庁
チーム長（都市近郊林管理担当)	島田　和則	7.11.23	農学生命科学研究科付属演習林教職員の当園見学に際して専門分野を中心とする講義の講師	東京大学大学院
教育的資源研究グループ	長谷川　絵里	7.11.23	農学生命科学研究科付属演習林教職員の当園見学に際して専門分野を中心とする講義の講師	東京大学大学院
主任研究員	岡　輝樹	7.11.26	令和７年度森林資源調査データ解析（第６期）第２回委員会出席	日本森林技術協会
園長	松本　麻子	7.11.28	第 24 回日本農学進歩賞授賞式･受賞講演会に日本森林学会総務担当理事として出席	日本森林学会
業務課	林　典子	7.12.9	特定外来生物キタリスの生態調査、指導（狭山丘陵）	環境省関東地方環境事務所
教育的資源研究グループ	設樂　拓人	7.12.13 ～12.14	令和７年度真鶴町の森林保全に係る調査指導	真鶴町
業務課	山田　茂樹	7.12.16	「山林」誌編集委員会への出席	大日本山林会
主任研究員	岡　輝樹	7.12.19	獣害対策部会における講演	日本林業経営者協会
園長	松本　麻子	7.12.23	日本森林学会 2025 年度第 4 回理事会･連携学会長合同会議	日本森林学会
業務課	山田　茂樹	8.1.14	「山林」誌編集委員会への出席	大日本山林会
主任研究員	岡　輝樹	8.1.29	造林地における鳥獣害防護施設（防護柵）の設置及び管理に関する技術指導	かがわ森林整備担い手対策協議会
主任研究員	岡　輝樹	8.2.4	令和７年度森林生態系多様性基礎調査における精度検証調査（第６期）第２回委員会及び令和７年度森林資源調査データ解析（第６期）第３回委員会出席	日本森林技術協会
主任研究員	岡　輝樹	8.2.5	令和７年度岐阜県広葉樹林化加速化検討チーム第３回会議出席	岐阜県林政部

主任研究員	岡　輝樹	8.2.25～2.26	２月例会出席	土佐林業クラブ
主任研究員	岡　輝樹	8.3.3	令和７年度東京都シカ管理計画検討会第 2 回専門部会及び意見交換会出席	東京都環境局
業務課	山田　茂樹	8.3.10	「山林」誌編集委員会への出席	大日本山林会
チーム長（都市近郊林管理担当）	島田　和則	8.3.25	特別緑地保全地区「青梅の森」第３回運営協議会出席	青梅市
業務課	山田　茂樹	8.3.30	令和７年度森林プランナー育成対策第 2 回企画運営委員会	全国森林組合連合会

３．海外出張

所　　属	氏　　名	期　間	出 張 国	研究・調査課題
教育的資源研究グループ	設樂　拓人	7.7.23～8.4	アメリカ合衆国	コロラド州における植生の現地視察 科研費若手研究「気候変動で森林群集の種組成はどう変わるのか？：分布予測モデルによる時空間変動予測」の研究成果を国際植生学会（IAVS）において研究発表
教育的資源研究グループ	平野　悠一郎	7.9.25～10.8	カナダ	農林水産省委託研究費「外来病害虫」における現地調査

４．シンポジウム等

シ ン ポ ジ ウ ム	開 催 月 日	開　催　場　所
該当なし		

研　究　資　料

１．令和７年気象観測資料

１）観測の位置

北緯 35° 38′ 33″　東経 139° 17′ 00″　標高 183.5m

東京都八王子市廿里町 1833－81　多摩森林科学園構内

多摩森林科学園正門から入園し左へ 10m

２）観測項目及び観測計器

気　　温：防湿型シース測温抵抗体式温度計

湿　　度：電気式湿度センサ

降　水　量：転倒枡型雨量計

地　　温：完全防水型測温抵抗体式温度計(地表面下 20 ㎝)

日 照 時 間：太陽電池式日照計

風向・風速：風車型風向風速計(地上 6m)

上記の各センサーからの受信信号が変換ユニットを介して取り込まれ、コンピュータで演算処理された後、1 時間ごとのデータがプリンターで印字される。

1990 年までは、観測項目の中で特に利用頻度の多い気温と降水量だけを取りまとめてきたが、1991 年から、当該年度の気温・降水量に加えて、地温・湿度・日照時間・風速などの観測資料を併せて掲上している。

なお、2009 年 3 月 10 日～3 月 17 日の期間は科学園内設置の気象観測機器の故障、2011 年 3 月 22 日、23 日、26 日、27 日は東日本大震災による電力不足に伴う計画停電、9 月 6 日～30 日の期間は雨量計の故障、2012 年 12 月 5 日～12 月 11 日の期間は気象観測機器の故障、2013 年 12 月 11 日～12 月 31 日の期間は日照計の故障、2014 年 1 月 1 日～12 月 31 日の期間は日照計の故障、2015 年 1 月 1 日～2 月 10 日の期間は日照計の故障、6 月 22 日～7 月 12 日及び 8 月 29 日の期間は科学園内設置の気象観測機器の故障、10 月 6 日の期間は科学園内設置の気象観測機器の検定によりデータが欠損、2016 年 4 月 20 日、4 月 29 日～4 月 30 日、5 月 1 日、5 月 14～5 月 16 日、5 月 31 日、6 月 1 日、6 月 3 日、11 月 17 日、11 月 21 日、12 月 28 日～12 月 31 日、2017 年 1 月 1 日～3 日、2 月 28 日、3 月 7 日～3 月 16 日、2020 年 4 月 15 日～4 月 20 日、12 月 17 日～12 月 31 日、2021 年 1 月 1 日～6 月 10 日の期間は日照計の故障によりデータが欠損、2022 年 8 月 12 日～11 月 21 日の期間は雨量計の故障によりデータが欠損、2023 年 2 月 10 日～2 月 13 日の期間は計画停電の影響でデータが欠損、4 月 15 日～5 月 23 日の期間は科学園内設置の気象観測機器のデータ不具合のためデータが欠損、5 月 23 日は科学園内設置の気象観測機器点検のためデータが欠損、2024 年 2 月 16 日～2 月 17 日、7 月 22 日～7 月 23 日、8 月 19 日～8 月 22 日の期間は

停電のためデータが欠損、9 月 19 日～12 月 31 日の期間は雹・雷・暴風のため装置が故障しデータが欠損（12 月 21 日～12 月 23 日の期間は八王子防災気象情報で欠測）2025 年 1 月 1 日～3 月 19 日の期間雹・雷・暴風のため装置が故障しデータが欠損、9 月 29 日 9 月 30 日は停電のためデータが欠損、10 月 2 日～10 月 12 日、10 月 19 日～10 月 29 日、11 月 2 日～11 月 5 日は記録用 PC の不調によりデータが欠損しているため、約 4km を隔てた八王子市天気相談所（北緯 35° 39’ 49” 東経 139° 19’ 13” 標高 123m 八王子市本郷 3 丁目 24 番 1 号）及び八王子市防災気象情報による気象月報をもって補っている。

3）参考文献

農林省林業試験場：浅川実験林の気象観測資料(大正 12 年～昭和 31 年)、
森林気象観測累年報告第 2 報(1960)

薬袋次郎：気象観測資料(昭和 53 年 6 月～同 57 年 12 月)、
林試浅川実験林年報 7 号（1985）

御厨正治ほか：気象観測資料(昭和 58 年～平成元年)、
多摩森林科学園年報第 11～12 号(1988～1989)

業務課：気象観測資料(平成 2 年～同 7 年)、
多摩森林科学園年報第 13～43 号(1990～2020)

八王子市天気相談所：気象月報第 577～588 号（平成 21 年 1 月～12 月）

八王子市防災気象情報：気象月報第 603 号、609 号（平成 23 年 3 月、9 月）
気象月報第 624 号（平成 24 年 12 月）
気象月報第 636 号（平成 25 年 12 月）
気象月報第 637～648 号（平成 26 年 1 月～12 月）
気象月報第 649～650 号、第 654～656 号、第 658 号
（平成 27 年 1 月～2 月、6 月～8 月、10 月）
気象月報第 664～666 号、第 671～672 号
（平成 28 年 4 月～6 月、11 月～12 月）
気象月報第 673～675 号
（平成 29 年 1 月～3 月）
気象月報第 712 号、720 号
（令和 2 年 4 月、12 月）
気象月報第 721～726 号
（令和 3 年 1 月～6 月）
気象月報第 735～736 号、第 740～743 号
（令和 4 年 3 月～4 月、8 月～11 月）
気象月報第 746 号（令和 5 年 2 月）

気象月報第 749 号（令和 5 年 5 月）
気象月報第 758 号（令和 6 年 2 月）
気象月報第 763～768 号
（令和 6 年 7 月～12 月）
気象月報第 769～771 号、第 777～779 号
（令和 7 年 1 月～3 月、9 月～11 月）

表1　日平均気温(℃)

日＼月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1	4.1	5.3	10.8	4.3	16.0	18.2	26.4	25.5	28.9	19.3	14.2	10.0
2	6.1	3.7	12.8	9.3	14.8	18.5	25.9	29.1	30.0	20.8	13.6	11.2
3	4.1	4.7	5.3	8.0	15.5	17.7	26.6	30.2	29.0	20.8	11.9	9.0
4	3.8	3.6	1.6	9.6	17.2	21.0	26.6	30.6	25.6	20.5	10.2	4.7
5	2.9	2.2	5.7	9.7	15.6	21.7	26.5	32.4	23.6	22.7	11.2	3.9
6	3.4	3.4	8.7	12.2	13.0	21.5	28.3	31.1	25.0	23.5	13.2	3.9
7	7.3	4.1	6.1	11.1	15.8	22.4	28.5	27.2	25.9	20.0	13.0	6.4
8	6.3	3.3	1.8	12.6	15.5	21.7	28.4	26.6	27.9	22.7	10.5	9.1
9	5.0	2.7	5.9	15.0	16.2	20.4	27.7	26.2	28.2	20.3	11.2	6.9
10	2.9	2.8	7.1	14.8	17.0	19.6	26.7	25.0	27.9	19.6	12.1	6.1
11	3.1	3.1	9.0	14.6	18.8	20.4	21.5	26.7	25.4	16.4	8.9	8.1
12	3.7	3.8	11.0	14.4	15.5	21.8	21.7	26.6	23.1	19.2	8.0	5.4
13	4.6	5.5	13.8	11.9	18.3	21.2	25.2	25.8	24.1	21.1	9.0	2.1
14	4.0	5.0	10.5	15.8	18.0	20.8	25.5	26.5	26.1	17.5	12.3	5.2
15	5.4	6.7	6.2	15.4	18.2	23.2	25.5	26.7	25.7	16.9	11.4	4.7
16	1.6	9.9	6.4	12.7	19.5	25.6	25.1	27.5	26.8	17.3	11.6	4.4
17	2.0	7.9	9.2	15.7	18.6	28.4	25.6	29.1	28.1	19.2	12.3	5.9
18	2.1	3.5	7.2	17.7	21.6	28.1	25.6	28.9	27.4	18.6	8.7	5.1
19	4.3	1.8	4.2	19.6	17.8	26.8	26.1	28.3	20.5	18.7	5.6	4.6
20	8.7	2.4	4.7	18.6	22.5	25.5	27.1	27.9	21.4	17.3	7.4	6.7
21	8.2	3.3	9.1	18.1	24.0	25.2	28.5	28.5	24.0	14.6	8.4	10.4
22	5.9	1.0	14.2	16.9	23.6	27.8	28.4	28.3	21.3	11.9	9.0	8.0
23	6.3	2.7	17.4	16.7	17.6	27.6	28.4	29.3	19.5	12.5	9.8	3.5
24	6.8	2.7	13.0	18.9	16.8	25.0	28.4	29.8	20.5	12.8	10.8	5.9
25	6.0	5.6	17.0	17.2	16.7	25.5	28.7	29.2	22.2	12.2	9.3	9.0
26	4.5	7.7	17.3	13.3	17.2	26.6	28.4	29.2	24.9	15.0	10.1	5.5
27	3.8	6.9	16.7	15.6	16.7	26.4	27.8	29.4	23.7	17.4	10.5	−0.2
28	7.0	8.9	19.9	16.0	19.1	26.7	28.3	27.4	22.7	13.9	10.3	3.4
29	6.1		7.3	14.8	18.1	25.9	28.6	26.6	26.0	12.3	7.2	4.5
30	4.0		7.8	14.1	14.2	27.3	28.2	29.6	22.9	12.0	8.8	6.0
31	4.0		5.4		15.0		27.5	29.2		13.5		5.4

表2　日最高気温(℃)

日＼月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1	12.3	11.6	19.4	6.7	22.1	23.5	34.2	30.0	35.0	20.2	18.4	17.3
2	14.4	6.1	21.0	12.2	16.6	22.4	32.1	35.2	35.6	27.2	19.1	16.0
3	7.9	8.6	13.2	9.6	21.9	18.6	31.5	35.9	36.0	25.3	17.7	12.3
4	9.5	10.3	4.5	18.0	25.2	27.3	31.6	36.6	28.0	23.1	16.1	9.7
5	10.2	10.0	9.4	15.7	21.0	26.9	32.1	39.1	24.5	27.6	15.5	10.8
6	9.7	9.2	13.6	17.8	13.8	27.9	34.3	37.3	31.5	30.0	18.3	10.3
7	12.8	9.7	11.1	19.3	23.0	29.3	33.5	30.2	31.7	22.3	20.8	14.5
8	11.8	9.2	4.6	19.3	22.5	27.8	33.4	34.3	35.6	28.7	15.0	17.4
9	12.9	10.8	13.3	23.1	20.4	25.4	32.5	31.7	33.5	22.5	13.1	11.9
10	8.8	10.8	15.4	21.6	19.3	20.4	33.4	26.8	31.8	23.1	18.8	12.8
11	11.0	12.2	13.9	20.6	24.5	21.7	22.6	30.3	33.0	18.7	15.2	14.9
12	8.9	13.0	16.0	22.0	17.7	25.9	24.6	28.4	24.7	23.2	12.7	10.2
13	13.0	12.3	19.9	13.0	24.8	24.8	31.0	28.7	26.2	25.6	12.3	701.0
14	11.9	13.9	18.2	22.8	25.5	24.0	29.8	31.7	30.7	19.3	18.1	9.5
15	15.2	14.0	10.4	21.9	24.7	27.5	26.8	33.5	28.4	20.2	16.5	13.3
16	8.6	15.8	8.2	22.0	25.6	30.1	29.7	31.7	32.2	19.4	16.8	11.1
17	10.1	16.1	15.8	24.4	21.7	35.2	30.7	36.1	35.3	25.4	21.3	12.7
18	9.4	8.8	13.0	25.0	24.5	35.5	30.9	37.1	33.5	24.1	13.6	12.8
19	10.0	8.2	10.2	27.4	21.2	34.4	31.1	34.8	24.4	24.0	11.5	10.8
20	13.9	10.4	13.2	25.4	32.9	30.9	32.5	34.8	23.4	22.3	12.9	11.3
21	13.0	9.9	17.5	26.1	29.8	29.7	34.8	36.4	29.1	16.0	15.6	13.7
22	13.5	7.6	24.9	23.4	28.6	35.3	34.5	34.8	25.4	13.5	15.5	13.4
23	14.1	9.9	26.0	18.4	21.5	33.1	34.6	35.6	23.9	17.4	15.0	8.0
24	13.1	9.6	18.3	23.5	20.4	27.9	35.2	37.6	27.0	16.3	17.2	7.7
25	11.7	12.5	24.4	21.6	20.0	28.7	34.6	34.6	27.5	13.2	12.0	12.1
26	11.9	17.2	26.7	18.1	20.9	32.1	34.8	34.1	32.4	16.3	17.6	10.6
27	10.8	15.6	22.9	22.5	19.9	31.4	34.1	36.2	28.3	23.4	15.2	5.0
28	14.1	16.9	26.1	22.5	26.0	34.2	35.1	31.7	27.1	20.9	17.9	10.6
29	12.3		14.4	23.3	22.9	32.2	37.2	33.2	31.7	17.0	13.4	11.4
30	11.3		14.7	22.7	15.1	32.9	35.3	37.8	26.8	18.0	14.7	14.2
31	11.8		7.9		16.6		32.9	35.6		17.2		12.1

表3　日最低気温(℃)

日＼月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1	−2.8	−2.0	2.0	1.8	8.7	14.4	23.2	22.7	23.8	16.8	10.4	3.3
2	−2.0	2.4	3.4	6.7	11.5	13.7	22.1	25.3	24.2	14.9	8.4	6.1
3	−0.3	1.0	0.5	5.9	9.7	16.9	23.4	26.9	24.4	16.4	6.8	4.2
4	−0.7	−1.7	0.1	3.5	11.3	15.1	23.2	25.3	24.3	18.8	4.1	−0.4
5	−3.6	−4.7	0.3	2.2	9.7	16.6	22.7	27.9	21.8	19.2	6.3	−1.9
6	−1.9	−2.2	6.3	5.9	12.3	15.7	24.0	26.9	20.3	19.4	8.5	−1.3
7	1.8	−1.2	1.1	6.5	11.2	17.5	25.1	24.7	20.9	18.4	6.9	−0.6
8	0.0	−2.9	0.1	4.7	9.1	18.5	25.0	22.5	22.8	17.8	5.7	1.9
9	−1.4	−5.4	1.1	6.6	11.1	17.7	23.6	21.8	25.4	17.5	9.7	2.8
10	−3.0	−5.5	−2.0	9.0	14.5	18.6	22.4	23.5	24.7	16.6	5.7	0.6
11	−4.3	−3.8	4.3	10.9	14.4	19.4	19.7	24.5	23.2	15.4	4.2	2.3
12	−1.8	−4.0	5.7	8.0	14.0	18.4	19.0	25.0	22.2	14.6	3.2	−2.0
13	−2.1	−1.6	7.3	10.9	13.8	18.2	21.2	24.5	22.6	17.5	6.3	−2.4
14	−2.8	−3.4	4.5	11.7	12.6	18.5	22.6	23.7	23.1	15.4	6.0	1.7
15	−2.2	−2.0	2.9	7.2	11.7	19.9	24.1	22.2	24.0	14.7	7.8	−0.7
16	−3.4	5.3	3.8	3.8	14.1	22.5	22.4	24.4	23.3	15.1	8.1	−1.0
17	−3.7	2.2	3.9	7.1	16.4	22.0	21.7	24.3	23.1	14.1	6.7	−0.2
18	−4.9	−1.7	3.8	10.4	17.6	23.2	20.7	24.6	22.4	13.4	2.7	6.0
19	−2.1	−4.7	0.2	12.8	13.9	22.5	21.4	23.6	17.7	15.0	0.9	−1.0
20	2.6	−6.1	−1.3	13.5	12.3	21.8	22.0	23.9	19.8	14.6	2.9	1.6
21	3.7	−4.9	0.1	11.0	18.0	21.0	23.4	23.9	20.4	13.4	2.4	7.6
22	−1.0	−3.7	3.7	9.3	17.1	20.5	24.6	23.7	17.7	10.4	3.5	1.4
23	0.0	−6.0	6.4	14.9	13.8	23.9	24.0	24.2	16.1	9.8	5.3	−1.6
24	−0.5	−3.7	8.3	16.0	14.7	22.8	24.0	25.0	15.3	10.2	5.2	3.4
25	−1.1	−5.1	7.2	13.8	14.3	23.1	24.4	25.7	16.8	11.2	5.3	6.0
26	−2.5	−1.7	9.7	9.0	14.3	23.8	23.6	25.1	19.2	13.2	4.1	−2.6
27	−3.4	−3.0	9.4	6.6	13.1	22.6	22.8	24.0	19.9	13.1	4.6	−4.1
28	0.2	0.9	14.4	12.3	14.1	20.7	23.2	22.7	18.4	8.9	4.5	−2.8
29	−0.9		3.2	7.5	13.3	20.4	22.3	21.2	21.5	8.8	2.4	−0.8
30	−3.8		3.2	5.1	13.0	22.0	23.1	23.9	19.1	8.6	3.3	0.3
31	−3.7		2.5		13.9		23.2	24.0		10.2		0.5

表4　日降水量（mm）

月／日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1				46.5			7.0	5.0		21.0	1.0	
2		6.0		32.5	107.0							
3			35.0	8.0		26.0					2.5	
4			9.5				38.0		0.5	1.5		
5			9.5				30.0		139.0			
6	24.5				20.0							
7					3.5							
8			4.0					4.0				
9					1.5						2.5	
10				6.5	3.5	6.0	19.0	1.5				
11				27.5		8.5	3.5	0.5	20.5	3.0		
12			5.0		3.5			1.5	21.5			
13				40.0				1.5	3.0			3.0
14				10.5		4.5	14.5					6.5
15			0.5			5.5	76.5		0.5	6.0		
16			20.0				17.0			1.5		
17			1.0		22.0		0.5			0.5		
18								26.0	6.5		0.5	
19			32.0						46.0	2.5	0.5	
20	2.0								6.0	5.0		2.5
21												1.0
22										4.5		0.5
23				4.0	1.5							
24					8.5	0.5				2.0		19.0
25					21.5	3.0				7.0	1.0	7.0
26				1.0		9.5				9.0		
27										0.5		
28			0.5	10.5	2.0							
29			15.5	0.5	1.5							
30					21.0				3.0			
31			3.0		20.0					60.0		
計	26.5	6.0	135.5	187.5	237.0	63.5	206.0	40.0	246.5	124.0	8.0	39.5

表５　令和７年気象表

事　項＼月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
気　　温　（℃）													
平均気温	4.8	4.4	9.5	14.2	17.6	23.6	26.8	28.2	24.9	17.4	10.4	6.0	15.6
平均最高	11.6	11.4	15.7	20.3	22.3	28.6	32.3	33.9	29.8	21.3	15.9	11.8	21.3
平均最低	-1.7	-2.5	3.7	8.5	13.2	19.7	22.8	24.2	21.3	14.3	5.4	0.8	10.8
最高（極）	15.2	17.2	26.7	27.4	32.9	35.5	37.2	39.1	36.0	30.0	21.3	17.4	39.1
起　日	15	26	26	19	20	18	29	5	3	6	17	8	2025/8/5
最低（極）	-4.9	-6.1	-2.0	1.8	8.7	13.7	19.0	21.2	15.3	8.6	0.9	-4.1	-6.1
起　日	18	20	10	1	1	2	12	29	24	30	19	27	2025/2/20
平均地温(℃)	—	—	10.8	13.4	17.4	21.4	25.6	26.2	25.1	19.9	12.7	8.5	18.1
湿　　度　（%）													
平均湿度	—	—	61.4	72.4	80.5	81.5	82.2	77.5	82.7	87.6	75.7	69.9	77.1
最小湿度	12.0	10.0	13.4	14.1	34.7	25.1	38.4	36.3	40.4	37.6	31.7	19.8	10.0
起　日	9	19	26	16	23	28	29	30	22	17	7	3	2025/2/19
降　水　量　（mm）													
月降水量	26.5	6.0	135.5	187.5	237.0	63.5	206.0	40.0	246.5	124.0	8.0	39.5	1320.0
最大日量	24.5	6.0	35.0	46.5	107.0	26.0	76.5	26.0	139.0	60.0	2.5	19.0	139.0
起　日	6	2	3	1	2	3	15	18	5	31	3	24	2025/9/5
降水日数(日)	2	1	12	11	14	8	9	7	10	14	6	7	101
日照時間(h)	228.2	228.9	147.4	134.0	97.9	117.2	170.4	164.1	136.3	67.6	137.1	130.5	1759.6
風　　速　（m/sec）													
平均風速	2.5	2.9	2.2	1.3	1.1	1.2	1.3	1.2	1.1	1.8	1.0	0.9	1.5
最大風速	11.0	13.5	11.5	12.8	12.3	11.5	15.1	9.9	10.4	10.0	9.3	13.2	15.1
起　日	29	13	7	5	1	6	15	31	28	6	3	26	2025/7/15
備　　考	平均地温：地中20cm、降水日数：0.5mm以上／日、最大風速：10分平均												

表6　47年間の平均気象（気温・降水量）

自1979（昭和54）年～至2025（令和７）年

	気　　温　（℃）					降　水　量　（mm）	
月別	平均	平均最高	平均最低	最高極	最低極	平均降水量	最大日量
1	2.9	9.1	-2.1	19.1	-10.1	50.8	96.5
2	3.9	10.0	-1.3	24.3	-9.4	54.7	86.0
3	7.5	13.5	2.0	28.9	-6.8	115.6	81.5
4	12.8	18.8	7.2	32.0	-3.2	126.5	119.0
5	17.3	22.9	12.3	35.2	1.4	133.0	137.8
6	20.7	25.1	17.0	38.0	8.8	178.7	206.5
7	24.3	28.7	20.9	39.4	10.4	182.0	184.0
8	25.5	30.2	21.9	39.1	14.2	240.7	358.5
9	21.7	25.9	18.6	38.9	7.5	258.1	264.0
10	16.0	20.2	12.3	32.7	1.0	209.7	479.5
11	10.4	15.3	6.1	25.4	-3.4	89.8	167.0
12	5.3	11.2	0.5	26.2	-7.1	50.1	205.0
全年	14.0	19.2	9.6	39.4	-10.1	1,689.8	479.5
起日	-	-	-	2018/7/23	1982/01/30	-	2019/10/12

普及広報の概況

１．一般公開における入園者数の内訳

（１）平成４年度（森の科学館開館時）からの有料入園者数の推移

上段は年度計、下段は累計

平成 ４年度	５年度	６年度	７年度	８年度	９年度
85,645	95,458	111,267	73,262	93,270	74,892
85,645	181,103	292,370	365,632	458,902	533,794
平成 １０年度	１１年度	１２年度	１３年度	１４年度	１５年度
71,570	71,954	77,364	94,322	48,297	74,665
605,364	677,318	754,682	849,004	897,301	971,966
平成 １６年度	１７年度	１８年度	１９年度	２０年度	２１年度
87,236	72,182	59,483	54,700	40,913	45,141
1,059,202	1,131,384	1,190,867	1,245,567	1,286,480	1,331,621
平成 ２２年度	２３年度	２４年度	２５年度	２６年度	２７年度
40,854	31,467	38,033	32,606	42,284	32,415
1,372,475	1,403,942	1,441,975	1,474,581	1,516,865	1,549,280
平成 ２８年度	２９年度	３０年度	令和 元年度	２年度	３年度
32,901	43,210	31,197	23,751	0	15,493
1,582,181	1,625,391	1,656,588	1,680,339	1,680,339	1,695,832
令和 ４年度	５年度	６年度	７年度		
22,591	16,173	10,831	18,863		
1,718,423	1,734,596	1,745,427	1,764,290		

※平成２６年３月より年間パスポートチケット発売のため、パスポート発券数およびパスポートでの再入園者数を通常の有料入園者数に加えた。令和８年２月２８日より販売休止。

※令和２年度はコロナ禍による閉園。令和６年度はサクラ保存林の閉鎖による入園者減。

（２）令和７年度入園者の内訳

内　訳	国	都　道 府　県	林　業 団　体	一　般	学　生	国内計	国　外	合　計
７年　４月	0	0	0	8,454	0	8,454	0	8,454
５月	0	0	0	1,190	0	1,190	0	1,190
６月	0	0	0	660	38	698	0	698
７月	0	0	0	799	63	862	0	862
８月	0	0	0	531	0	531	17	548
９月	47	0	0	603	15	665	0	665
１０月	16	0	0	820	109	945	0	945

１１月	0	0	0	1,569	0	1,569	0	1,569
１２月	0	0	0	794	17	811	0	811
８年　１月	0	0	0	1,030	0	1,030	0	1,030
２月	0	0	0	1,401	0	1,401	0	1,401
３月	0	0	0	2,876	0	2,876	0	2,876
合　計	63	0	0	20,727	242	21,032	17	21,049

※「一般」の入園者数には無料入園者を含む。
※一般入園の外国人は「一般」に含む。
※令和元年１０月より、"森の科学館のみ見学"の場合、無料入園としている。

（３）気象災害等による多摩森林科学園開園状況

R7 年 12 月 2 日～ R8 年　3 月 1 日	柳沢林道の一部を開放（野鳥観察者対応）

※気象災害等による閉園なし

２．森林講座・特別観察会の開催状況

区分	実施月日	テ　ー　マ	参加数	講　　師
講座	R7. 6.13	樹木に不可欠な水は木材利用の悩みの種	17	木材加工・特性研究領域 鳥羽 景介
講座	R7. 7.11	ボルネオの森のきのこと昆虫	29	生物多様性・気候変動研究拠点 山下 聡
講座	R7. 8.20	シカは減っているのか？効率的な個体数管理のためのメスジカの捕獲	28	九州支所 鈴木 圭
講座	R7. 9.19	野と林の近現代史	29	関西支所 八巻 一成
講座	R7.10.24	木の香りを活かして、生活を少し豊かに	28	森林資源化学研究領域 森川 卓哉
講座	R7.11.21	雪と森林	19	森林防災研究領域 （十日町試験地） 勝島 隆史
講座	R7.12.19	固有種の宝庫、小笠原諸島の林木遺伝資源保全に向けた取組	17	遺伝資源部保存評価課 玉城 聡
講座	R8. 1.22	日本へとつながるアジア大陸の人類移動、氷河期の森林拡大が要因だった	31	北海道支所 志知 幸治
講座	R8. 2. 5	赤トンボの知られざる旅-生息地のつながりを理解しよう-	29	九州支所 東川 航

区分	実施月日	テ　ー　マ	参加数	講　　師
特別	R7. 6.28 （２回）	冬虫夏草 （資料 8-2-1）	21	佐藤大樹、井上大成
特別	R7. 7.27	夏休みこども昆虫教室 （資料 8-2-2）	14 付添者含む	井上大成
特別	R7. 8. 6 R7. 8.21	身近な緑をまもるための植物観察 （資料 8-2-3）	3 9	島田和則、阿部 真、 長谷川絵里
特別	R7.10.21	きのこの観察会 （資料 8-2-5）	20	根田 仁、長谷川絵里
特別 講演	R7.10.25	クマ講座	約 50	岡 輝樹、大西尚樹、 佐藤嘉宏(野生動物写真家)
特別	R7.11. 8 R7.12. 7 （各２回）	くさぶえ体験（初級編） （資料 8-2-4）	11 7	井上大成

３．各種取材等への協力

テレビ	ラジオ	ＨＰ･web	新　聞	週刊誌	月刊誌	その他	合　計
１２	０	１５	４	０	２	７	４０

（1）テレビ

概　　要	発表媒体	対応者
「高尾の春の自然めぐり」をテーマにした特集コーナーのための取材、撮影	「なないろ日和！」テレビ東京 R7.4.23	鈴木
森の科学館、樹木園、サクラ保存林、ガイドツアーの様子を取材、撮影	「至高のひととき」TOKYO MX R7.6.2	井上(大) 鈴木
クリハラリスの神奈川県及び横浜市における生息数などについて取材	「イット！」フジテレビ ＊番組制作にあたっての取材	林
横浜で大繁殖しているクリハラリスの生態、生息範囲、被害などについて取材	「Ｎスタ」TBS テレビ ＊番組制作にあたっての取材	林
クマのディスタンスシートの紹介について園内で撮影	「サン！シャイン」フジテレビ R7.10.2	鈴木
「クマ講座」での講演について部分的に撮影し、番組内で紹介	「関口宏のこの先どうなる!?」 BS-TBS ＊番組制作にあたっての取材、撮影	大西(東北支所) 鈴木
クマの今年の動向や近年の生態、クマに出会わないための必要な対策などについて取材、中継	「午後 LIVE ニュースーン」ＮＨＫ R7.10.23	岡

クマによる人身被害について、その傾向と対策について生放送で解説	「Nスタ」TBS テレビ R7.11.2	岡
「九州はクマ大丈夫？」というテーマのニュースにおいて専門家として解説	ニュース番組　大分朝日放送 ＊番組制作にあたっての取材	岡
クマの生息が確認されていなかった京都府山城地域での対策について取材	「京いちにち」NHK 京都 ＊番組制作にあたっての取材	岡
リスの生態について取材	「ヴィランの言い分」NHK E テレ ＊番組制作にあたっての取材	林
沖縄でソメイヨシノが開花しない理由について取材	「グッド！モーニング」テレビ朝日 ＊番組制作にあたっての取材	岩本

（2）ラジオ

概　　要	発表媒体	対応者
（該当なし）		

（3）ホームページ・web メディア等

概　　要	発表媒体	対応者
多摩森林科学園の紹介	「中央線が好きだ。」 JR 東日本、(株)交通新聞社	鈴木
多摩森林科学園の紹介	「東京教育旅行ガイド」 (公財)東京観光財団	鈴木
多摩森林科学園の紹介	農林水産省 web マガジン「aff」12 月号　農林水産省大臣官房広報評価課	松本 菊池 鈴木
企画展「クマ ― かわいい？ こわい？ ― “知る”という選択」の紹介	農林水産省の YouTube「BUZZMAFF」 農林水産省大臣官房広報評価課	岡 菊池 鈴木
企画展の紹介	「リビング多摩 Web」 サンケイリビング新聞社	鈴木
多摩森林科学園の紹介	「ナビタイム」 (株)ナビタイムジャパン	鈴木
クリハラリスについて取材	「ソトラバ」 (株)交通タイムス社	林
多摩森林科学園の紹介	「まっぷる観光情報花見特集 2025」 (株)昭文社	鈴木
多摩森林科学園の紹介	「じゃらん net」他 協同組合インフォメーションテクノロジー関西	鈴木

ニホンジカについて取材	「ソトラバ」 (株)交通タイムス社	岡
多摩森林科学園の紹介	「ナビタイム」 (株)ナビタイムジャパン	鈴木
多摩森林科学園の紹介	「るるぶ観光データベース」 株式会社アドレスサービス	鈴木
多摩森林科学園の紹介	「レッツエンジョイ東京（お花見特集）」　(株)レッツエンジョイ東京	鈴木
多摩森林科学園の紹介	「JAPAN 47 GO」 (公社)日本観光振興協会	鈴木
多摩森林科学園の紹介	「八王子観光コンベンション協会 HP」 (公社)八王子観光コンベンション協会	鈴木

（４）新聞

概　　要	発表媒体	対応者
企画展の紹介記事のための写真提供	「読売新聞」 読売新聞社会部八王子支局	菊池
クマの特集記事のためのクマ講座の取材	「読売新聞」 読売新聞東京本社	大西(東北支所)
クマの生息域拡大と対策について	「読売新聞（朝刊地方面）」R7.11.14 読売新聞京都総局	岡
クマによる人身被害の理由、傾向と対策について	「しんぶん赤旗」R7.12.14 しんぶん赤旗	岡

（５）週刊誌

概　　要	発表媒体	対応者
（該当なし）		

（６）月刊誌

概　　要	発表媒体	対応者
（該当なし）		

（７）その他

概　　要	発表媒体	対応者
東宝カレンダーの３月のページを園内で撮影	「2026 年版東宝カレンダー」 (株)東宝映像美術	鈴木
ＮＨＫ杯全国高校放送コンテスト応募作品の制作のための取材	「ＮＨＫ杯全国高校放送コンテスト」 青山学院横浜英和高等学校放送部	林

企画展の紹介	「エコチル」（環境情報紙）R7.11.4 エコチル編集部	鈴木
多摩森林科学園の紹介	「高尾山もみじまつりガイドブック」 (公社)八王子観光コンベンション協会	鈴木
多摩森林科学園の紹介	「多摩散歩地図」 (株)アド・グリーン	鈴木
児童書の出版にあたってのサクラに関する質問	「こどものとも」 福音館書店	岩本
多摩森林科学園の紹介	「としょかん通信（３月号）」（かべ新聞）　ニシ工芸(株)	鈴木

４．刊行物

概　　要	配布部数	対応者
多摩森林科学園年報（令和７年版 第 47 号）	ホームページ掲載	

５．イベント

概　　要	開催場所	対応者
2025 年企画展 ・「クマ」―かわいい？こわい？― ”知る”という選択　R7.9.17～11.30 （資料 8-1） ・「ことばであそぶ クマとまなぶ」（子供向けイベント） R7.10.4、11.1、11.22	森の科学館	岡 輝樹 大西尚樹（東北支所） 中下留美子（野生動物研究領域）

※特別観察会、企画展特別講演会は、２．森林講座・特別観察会に掲載

６．ガイドツアー開催回数

年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
令和３	0	0	0	0	0	0	4	14	13	0	0	0	31
令和４	0	10	15	13	13	12	9	15	11	10	14	11	133
令和５	0	13	17	14	12	13	16	12	13	13	9	9	141
令和６	0	15	14	16	15	10	11	12	12	15	13	7	140
令和７	0	14	12	15	11	10	16	13	13	13	12	7	136

＊サクラの季節（３月後半～ＧＷ）は混雑するため、ガイドツアーは休止

７．森の科学館および野外展示概要（令和８年３月末現在）

森の科学館１階

種　　類	内　　容
展　示　物	◎タネの引き出し　◎木材標本に触れてみよう ◎大正時代・海外のサクラの文献　◎樺細工の工芸品 ◎クビアカツヤカミキリの生態　◎サクラ類てんぐ巣病の病枝　◎サクラのアクリル
映像装置	◎ムササビの親子 ◎大型ディスプレイ３台（樹木、昆虫、動物、コーナー１台）
標　　本	◎スギの古木　◎ダグラスファーの巨木　◎モミの年輪板 ◎ヒノキの年輪板　◎材鑑：４種類　◎腊葉標本：４種類 ◎サクラの花のアクリル標本　◎ニホンリス、アカネズミ、ムササビ、ニホンイタチ、テン、アナグマ、ハクビシン、タヌキ、アライグマ、イノシシ、ニホンジカ ◎カマキリ他昆虫の標本：１２１種類 剥製 ◎二ホンアナグマ　◎タヌキ　◎ニホンノウサギ　◎ニホンリス　◎アカネズミ ◎アブラコウモリ　◎アライグマ　◎アズマモグラ　◎二ホンテン　◎イノシシ ◎ムササビ　◎ツキノワグマ　◎ハクビシン　◎二ホンイタチ ◎ヒミズ　◎ニホンジカ 科学園で見られる野鳥の剥製 ◎トラツグミ　◎シロハラ　◎メジロ　◎エナガ　◎シメ　◎アオバト　◎ヤブサメ　◎クロジ　◎アオジ　◎カルガモ　◎カワセミ　◎ガビチョウ ◎ソウシチョウ　◎キレンジャク　◎ウソ　◎ミヤマホオジロ　◎ヤマガラ
写　　真	◎航空写真
解説パネル	**ようこそ　多摩の森へ** ◎Research on suburban forests　◎日本の森林帯　◎自然林・二次林・人工林 ◎多摩の都市近郊林　◎森林がもたらす恵み　◎科学園に生育する植物　◎科学園の植物の変遷　◎科学園で消えた植物、侵入した植物　◎Research on biodiversity　◎科学園の昆虫相　◎Insect fauna of Tama Forest Science Garden ◎科学園のチョウ類 100 周年を迎えて（１）（２）（３）　◎都市の昆虫の生息場所としての研究所の自然①②　◎科学園の鳥類 100 周年を迎えて（１）（２）（３）　◎科学園の哺乳類 100 周年を迎えて（１）（２）（３） ◎木質ペレット　◎花咲かクマさんサクラのタネを運ぶ　◎クマの数が増え

種　　類	内　　容
	て広がっている　◎マダニに注意！ **ようこそ　サクラ保存林へ** ◎Research on cherry tree preservation　◎サクラとは　◎‘染井吉野’の生い立ち◎日本のサクラの分布域　◎新種の発表　◎クマノザクラの特徴　◎‘染井吉野’の増殖とクローン　◎江戸時代の桜　◎サクラの巨木　◎サクラの株年齢　◎明治・大正時代の桜 －荒川堤－　◎はるか　◎サクラの樹皮と樺細工 ◎サクラ保存林の造成 ◎サクラの栽培品種　その１　伝統を正しく引き継いで、未来に ◎その２　良好な例：名前と遺伝子型が一致 ◎その３　１つの名前の中にいくつもの遺伝子型！？ ◎その４　別の名前なのに遺伝子型が同じ！？ ◎サクラ保存林の役割　◎さまざまなサクラの開花期　◎サクラの病害（てんぐ巣病）　◎サクラの病害(幼果菌核病）◎Disease on Cherry trees: witch's broom ◎外来害虫クビアカツヤカミキリの防除方法　◎サワラ等バラ科樹木を食害する外来種 ◎サクラの病害（腐朽病害）　◎サクラの病害（増生病）　◎サクラ開花期の変化　◎多くの樹木を食害する外来種
図書コーナー	◎森林・林業関係図書：約６７０冊

森の科学館２階

種　　類	内　　容
展　示　物	**森林の学校（森林環境教育）** ◎樹木を学ぶ教材　◎樹木を測る道具　◎林業に使う機械　◎ドローン ◎建物に使われている木材　◎さまざまな木製品② ◎森林の職員室　◎40 活動本　◎国産材の利用－木育
映 像 装 置	◎多摩森林科学園紹介ビデオ
解説パネル	◎Research on forest environmental education　◎ようこそ森林の学校へ　◎１時間目　樹木をとらえる ◎２時間目　樹木を測る　◎３時間目　木材を収穫する ◎４時間目　木の建物　◎５時間目　木材のつくり　◎６時間目　木製品 ◎森林の職員室　－森林で学びを支援する指導者のために－ ◎森林の職員室－教材－ 　　－森林での学びを支援する指導者のために－ ◎森林を教える森林教育　◎森林を伝えるテーマ・内容 ◎森林を教える活動の種類　◎森林を教える活動事例

種　　類	内　　容
展　示　物	**森林総合研究所（つくば市）の研究** ◎いろいろな木質材料 ◎木材から新素材を作る　◎いろいろな木材の重さ　◎はたらく林業機械 ◎木からお酒をつくる
解説パネル	◎木材で大きな建物をつくる　◎いろいろな木質材料　◎国産材の利用－木育　◎生産物：木材を使う　◎世界一重い木、軽い木　◎林業機械の「むかし」と「いま」　◎森と木を活かして地球温暖化を防ぐ　◎木を余すことなく使って地球温暖化防止 ◎木から出る音　◎色々なお酒の造り方　◎木からお酒をつくる　◎半炭化した木チップで草の生えにくい遊歩道をつくる　◎ナノセルロースが拓く木材利用　◎セルロースナノファイバーで木材を長もちさせる　◎未利用バイオマスから木材プラスチック複合材の開発　◎木材中の放射性セシウム、12年の変化　◎放射性セシウムは硬質土層表層から動かない　◎津波等の外力に対する樹木の強さ　◎日本に自生する白トリュフを継続的に発生させることに成功した　◎2025 年にめざす森　◎森林総合研究所の研究紹介

野外展示の概要

種　　類	内　　容
樹木解説板	園内に67枚の解説板　＊ガイドマップを森の科学館で配布
サクラ解説板	サクラ保存林内に53枚の解説板
獣との適切な関わり方の啓発看板	園内に18枚の解説板
こんちゅうスポット	園内に約60箇所の解説板
森のポスト	第２樹木園内に９箇所の解説板
草本・シダ解説板	園内各所に設置、季節により設置箇所変動あり

企画展「クマ ― かわいい？ こわい？ ―“知る”という選択」開催報告

岡 輝樹

１ 企画展の概要

目　的：ぬいぐるみやキャラクターの「かわいい」と報道の「こわい」という二面的なイメージの先にある野生動物としてのクマの姿を紹介し、人とクマとの適切な距離を来場者とともに考える。

開催場所：多摩森林科学園 森の科学館

開催時期：令和 7 年 9 月 17 日（水）～11 月 30 日（日）

企　画：岡輝樹、中下留美子（野生動物研究領域）、林典子（研究専門員）

協　力：ミュージアムパーク茨城県自然博物館、NPO 法人信州ツキノワグマ研究会、多摩動物公園、佐藤嘉宏氏（野生動物写真家）、柏木牧子氏（イラストレーター）

経　費：産学官民・地域連携推進活動費、研究管理費（普及広報経費）

２ 趣旨と企画の経緯

クマは、絵本やアニメでは愛らしい存在として描かれる一方、報道では恐怖の対象として取り上げられる。この「かわいい」と「こわい」の二面性は、クマそのものよりも、擬人化されたキャラクター、生息地からの物理的な距離、立場や経験といった受け手側の視点によって生まれる。本企画展は、クマを二択で捉えるのではなく、科学的な知見にもとづいて多面的に理解すること、すなわち“知る”ことを自ら選び取る契機を提供することをねらいとした。「知るという選択」という副題には、感情で反応する前に現実を見ようとする態度を来場者と共有したいという意図を込めている。

多摩森林科学園が所在する八王子市を含む東京都多摩地域にもツキノワグマは生息しており、その分布は拡大しつつある。一方、来園者の多くを占める都市住民にとって、クマはまだ報道を通して知る存在である。そこで、生息地と都市の境界に位置する科学園を、都市住民がクマとの距離を考える場として位置づけた。企画を令和 7 年 6 月に起こし、タイトル・解説パネル・体験展示・関連行事を約 3 か月で準備した。開催経費として産学官民・地域連携推進活動費の配賦を受けた。

3 展示内容

展示は、写真・原画、解説パネル、さわれる標本の 3 つで構成した。

写真・原画では、約 30 年にわたりツキノワグマを記録してきた佐藤嘉宏氏の生態写真展と、日本哺乳類学会誌 Mammal Study の表紙画を担当する柏木牧子氏の絵本『信州版 森の子クマの子』原画展を行った。

解説パネルは、子どもにも読める平易な文章と図を用い、次の内容を取り上げた。

・日本のクマの分布と東京都の生息状況（「クマのいる国、日本。」、「比べてみよう 日本のクマたち」）

・食肉目でありながら植物中心の食性と消化器官（「クマの不思議なごはん事情」）

・約 40 年間でクマ類の分布域が 1.7 倍に拡大した背景と、有害駆除数の推移（「山から里へ、そして街へ？」、「クマの数が増えて広がっている」）

・胸の月の輪模様による個体識別と GPS 首輪による行動調査（「世界にひとつだけの月の輪」）

・ブナの豊凶と出没の関係（「山の実りが運命を変える」）

・体毛の安定同位体比でたどる食歴と人里依存（「まちのごちそう、森のごちそう」）

・種子散布やクマ棚を通じた森林生態系での役割（「森に暮らすクマ」）

このほか、茨城県の博物館から借用したツキノワグマ全身骨格標本、クマ・シカ・イノシシなどの毛皮や足型を展示した。毛皮や足型には直接触れることができ、手のひらの骨格模型を組み立てたり、足の骨格模型を動かしたりできる体験展示とした。会場内には小中学生向けの「たまっクマをさがせ！」も設けた。

4 関連行事

（1）体験プログラム「ことばであそぶ、クマとまなぶ」

10 月 4 日、11 月 1 日、11 月 22 日（いずれも土）の午前と午後に、信州ツキノワグマ研究会の協力を得て、ツキノワグマかるたと紙芝居「森の子クマの子」を実施した。事前申込制（先着順）とし、参加者は延べ 50 名ほどであった。あわせて、解説パネルや展示物から答えを探す

「クマクイズスタンプラリー」（10 問）を会期中に実施し、全問正解者には缶バッジを進呈した。

（2）クマ講座

10 月 25 日（土）13 時〜16 時に、森の科学館で開催した。プログラムは以下のとおりである。

・「クマを知る、という選択」岡 輝樹（多摩森林科学園）

・「東京都にもクマがいる!? どうして街にクマがでる？」大西尚樹（森林総研東北支所）

・「〜森に生きる〜 ツキノワグマの暮らし」佐藤嘉宏氏（野生動物写真家）

・総合討論「クマとの距離」（進行：岡）

岡は、クマが食肉目でありながら植物を主食とし、食物に強く執着せざるを得ない理由を紹介した。さらに、秋田県ではブナの凶作指数と有害駆除数が同調すること、全国の有害駆除数と人身被害者数が強く相関することを示した。大西氏は東京都を含む分布拡大と市街地への出没の背景を、佐藤氏は個体識別をしながら撮り続けたクマの暮らしを紹介した。総合討論では、クマとの距離を「時間」「空間」「心」の 3 つの距離として整理し、来場者とともに「正しく恐れる」ことの意味を考えた。

聴講は事前申込制としたが、受付開始後約 10 日で定員 40 名に達し、50 名に増員した時点で締め切った。その後も聴講希望が続いたため、講座を記録した映像を発表者ごとに分け、12 月 19 日から YouTube で配信を開始した（2026 年 10 月時点で総再生回数 1 万 3 千回超）。

なお、講座の内容の一部は環境研究総合推進費（JPMEERF20254002）により実施した。

5 広報と成果

広報では、チラシを地域の小中学校・図書館・博物館等に配布したほか、多摩動物公園で企画展ポスターと解説パネルを掲示していただいた。また、科学園と外部道路の境界に幟を設置した。会期中には報道機関の取材を受けた。

令和 7 年度はクマの出没と人身被害が全国で相次ぎ、社会の関心がきわめて高かった。会期中の森の科学館のみの来館者数は 616 名であった（前年同期 194 名）。クマ講座が短期間で満員となったことは、科学的な情報への需要の高さを示している。一方、クマのイラストを配し

た幟については、クマが出没したと誤解されることを懸念する意見が近隣から寄せられた。出没が身近な地域でクマを扱う広報では、受け手の受け止め方への配慮が必要である。

謝辞

本企画展の開催にあたり、写真を提供いただいた佐藤嘉宏氏、絵本原画を提供いただいた柏木牧子氏、骨格標本を貸与いただいた茨城県の博物館、かるた・紙芝居等でご協力いただいたNPO 法人信州ツキノワグマ研究会、企画展の紹介の機会をいただいた多摩動物公園、写真を提供いただいたけもの調査室・瀧井暁子氏、データを提供いただいた秋田県・東北森林管理局、そして準備と運営にあたった科学園職員に、厚く御礼申し上げる。



企画展会場の様子



研究成果の解説パネル



佐藤嘉宏氏によるクマの生態写真展



柏木牧子氏による絵本『信州版 森の子クマの子』原画展



体験プログラム「ことばであそぶ、クマとまなぶ」



クマ講座の様子





企画展のチラシ

2025 年 6 月 28 日(土) に「特別観察会」を開催します

■ テーマ：「冬虫夏草観察会」

昆虫やクモなどの節足動物もヒトのように病気になります。病原体の中には、虫を殺した後にきのこを作る冬虫夏草類と呼ばれる菌類があり、今回の主役「**クモタケ**」もその仲間です。植え込みなどの下に筒状の巣を作る地中生のクモが攻撃を受け、梅雨時期になると、クモの巣の天井の扉を開けてきのこが伸びだします。今回は地中のクモから発生するきのこ「**クモタケ**」や、その他の冬虫夏草類を探します。何が見つかるかはお楽しみ！

■ 日　時：2025 年 6 月 28 日（土）　午前：10:00～12:00　定員 10 名
　　午後：13:00～15:00　定員 10 名

■ 場　所：樹木園および周辺の野外（多摩森林科学園）

■ 参加費：無料　＊通常の入園料は必要です。パスポートもお使いいただけます。

■ お申し込み方法（１件のお申し込みに際しては２名までとさせていただきます）
メールで、①氏名　②住所　③電話番号　＊２名でお申し込みの場合お二人の情報
④午前か午後か、について　kouhotama@ffpri.affrc.go.jp　までお申し込みください。
＊お申し込みいただいてから１週間以内に返信メールが届かない場合は、受付が完了していませんので、下記の電話番号にお問い合わせ願います。
＊個人情報はこの観察会の事務手続きおよび連絡以外の目的では使用しません。

受付開始：2025 年 5 月 26 日（月）　＊受付終了：6 月 27 日（金）15 時

◆ 当日が悪天候（強雨・強風等）の時は中止。事前に中止が決定した場合には、メールまたは電話で前日の午後５時までにご連絡いたします。
当日、天候が急変した場合には、内容を変更することがあります。
◆ 汚れても構わない服装・靴でご参加（ご持参）ください。
＊ケガの危険がありますので、サンダル等での参加はご遠慮ください。
◆ 定員に達した段階で受付を終了させていただきます。（各回 10 名）
◆ 参加する回はご希望どおりにならない場合もあります。


植え込みの下のクモタケ


掘り出した状態

○ 問い合わせ先電話番号：042-661-1121(代表)　担当：業務課　鈴木

2025 年 7 月 27 日（日）に
「夏休みこども昆虫教室」を開催します

地球上の生き物の中で一番種類が多いのは昆虫です。これまでに約75万種もの昆虫が知られています。私たちはまさに虫の惑星に住んでいるのです。昆虫を調べることで、何がわかるのでしょうか？　昆虫を調べる方法について、室内でのお話と、実際に捕虫網を使った昆虫採集の体験、標本の作り方の実習を通して学びます（作った標本は持ち帰れます）。

■ テーマ：

昆虫の調べかたと標本の作りかた



■ 日　時

・2025 年 7 月 27 日（日）

午前：10:00～12:00　定員 8 名

■ 場　所：「森の科学館」とその周辺の野外（多摩森林科学園）

■ 参加費：無料　　＊通常の入園料は必要です。パスポートもお使いいただけます。

■ 対象：小学３年生以上と中学生　＊小学５年生以上はお子さんだけでの参加も可。
小学１・２年生の参加についてはご相談に応じます。

※　対象年齢以下のきょうだい（幼児）は原則として入室できません（昆虫針やハサミなども使います）。

■ お申し込み方法（１件のお申し込みに際しては、こども２名までとさせていただきます。）
メールで、①住所、②氏名、③学年、④電話番号（２名でお申し込みの場合お二人の情報）、⑤保護者の氏名・連絡先、⑥参加希望の日と回（何月何日の午前か午後か）、を明記して kouhotama@ffpri.affrc.go.jp　までお申し込みください。
※お申し込みいただいてから１週間以内に返信メールが届かない場合は、受付が完了していませんので、下記の電話番号にお問い合わせ願います。
※個人情報はこの昆虫教室の事務手続きおよび連絡以外の目的では使用しません。

◆ 受付開始：2025 年 6 月 23 日（月）
各回の定員に達した時点で受付を終了させていただきます。
定員に達しない場合でも開催日の 3 日前（7 月 24 日）の 15 時に受付を終了します。

◆ 捕虫網は貸し出しますので、持参しないでください。虫かご等もお持ちにならないでください。

◆ 当日の天候によっては、中止または内容を変更することがあります。事前に中止が決定した場合には、メールまたは電話で、開催日前の金曜日（7 月 25 日）の午後 5 時までにご連絡いたします。

○ 問い合わせ先電話番号：042-661-1121(代表)　担当：業務課　鈴木

特別観察会　身近な緑をまもるための植物観察

身近にある都市近郊の森をより深く理解するため、樹木研究室では 2013 年から植物観察会を毎年行ってきました。この観察会は開始当初は「森林教室」として始めたもので、単に植物名を覚えることよりは、森づくりや保全につなげるための植物の見方を主眼とし、講義と野外観察の 2 部構成で行っています。

今回もテーマを「身近な緑をまもるための植物観察」として、当園の柱の一つである都市近郊林の研究から得た知見をベースに、身近な緑をまもるために役立つことを分かりやすく伝えることを目指しました。森林の管理と植物観察を結びつけ、作業志向の森林ボランティアには観察の重要性を、観察志向の市民には森の管理の重要性を伝えられたらと考えました。

今年も 1 回あたりの募集最大定員を 20 名とし、同じ内容で 2 回行う形にて開催しました。当初は昨年度と同時期に開催する計画でしたが、講師のケガのため 1 回目は当初計画より 1 週間遅くなりました。今年は昨年閉じていたサクラ保存林の公開を再開したものの、開催日が猛暑日となり例年以上に暑いため、野外観察は日なたが多いサクラ保存林までは行かずに、昨年と同様に科学館そば～第 2 樹木園の日陰のみで行いました。

8 月 6 日(水)　身近な緑をまもるための観察(講義：島田)　　3 名参加(うち学生 1 名)
スタッフ：島田(企画・講師)、松村(運営補助)、鈴木・長谷川(広報展示事務局)
8 月 21 日(木)　身近な緑をまもるための観察(講義：島田)　　9 名参加
スタッフ：島田(企画・講師)、阿部(運営補助)、鈴木・菊池・長谷川(広報展示事務局)

当園は森林教育を一つの柱としていることから、受付方法は定員を超えた場合は学生さんを優先し、残りの方は抽選としましたが、結果的に 2 回とも定員内におさまり、申し込んでいただいた方には全員参加していただきました。内容は例年通り、午前中は 2 時間程度の講義を行い、午後は植物観察を行いました。2 回とも参加人数が一桁だったため、特に午後の観察は丁寧に和気あいあいと行うことができました。

1 回目は猛暑日となる予報がでており、午後は相当暑くなることが予想されました。時間前に参加者が全員揃ったので、気温が上がる前に少しでも行程を進めるために午前の開始時間を 10 分、昼の休憩時間を 20 分それぞれ前倒し、午後の野外観察を 12 時 40 分から開始しました。野外観察は森の科学館付近と第 2 樹木園の日かげのみで行い、サクラ保存林の手前で引き返すコースとしました。猛暑にもかかわらず参加者は熱心に植物観察をされ、終了は 14 時 50 分頃となりました。

2 回目も猛暑日となり、さらに午後に雷雨の可能性があったため、午後の野外観察は 5 分前倒しで行いました。コースは 1 回目と同様です。雷鳴が聞こえ大気の状態が不安定となってき

たので、終了は前倒しし 14 時 45 分頃となりました。

観察会の休日開催はスタッフの休日出勤などハードルが高いので、これまで平日開催を基本としてきました。平日開催でも学生さんが参加できるように、2018 年から学校の夏休み期間に行ってきました。この時季が暑いことは承知の上で、野外観察のコース設定など工夫しながら行ってきました。しかし、夏休み期間は猛暑日が続き、特に第 1 回開催日の 8 月 6 日は八王子市の最高気温が 39.3℃と体温越えの異常な暑さとなりました。来年以降もこの気象傾向が緩和されることは期待できないので、今後の開催にあたって実施時季については再検討します。その際には、休日開催も選択肢に入れたいと思います。

（島田和則）



講義の様子



野外観察の様子

特別観察会 **くさぶえ体験（初級編）**

2025 年 11 月 8 日と 12 月 7 日に、特別観察会「くさぶえ体験（初級編）」を開催した。特別観察会としては 2 回目の試みで、合計で 18 名の参加者があった。参加者の多くは近隣都県からの方であったが、長野県などの遠方からお越しいただいた方や中国籍（日本在住）の方もいた。前年と同様、ムクロジの実に穴をあけて作る笛、カラムシの葉を手で破って音を出す方法、サザンカの花びらを唇にあてて音を出す方法、イスノキの虫こぶを使った笛（猿笛）、アオキの葉を折って作る笛、ヒサカキやツルマサキの葉を巻いて作る笛などを体験していただいた。また実際に生えている植物を樹木園で観察し、それぞれの植物についての解説を聞いていただいた。参加者は小学生から 70 代に及んだが、最後にはほとんどの参加者がどれかの植物で音を出すことができるようになった。　（井上大成）



ムクロジの実に穴を開けてストローで「ピィーッ！」



カラムシの葉で「パンッ！」



ヒサカキの葉を丸めて「プーッ！」



アオキの葉も草笛に

きのこの特別観察会を開催します



きのこは一年中発生しますが、秋には特に多くの種類のきのこが見られます。今回はきのこの特別観察会として、きのこの研究者と一緒に樹木園を回り、普段、なかなか見る機会のない野生きのこを観察しながら、きのこの生態や名前を紹介します。

ルーペをお持ちの方は、持参をお勧めします。お持ちでない方にはお貸しします。

開催日程　　**２０２５年　１０月２１日（火）**
時　　間　　**１０：００～１４：３０**
１０：００～１２：００　講義
１３：００～１４：３０　野外観察
受付場所　　**多摩森林科学園「森の科学館」**
参 加 費　　**入園料のみ（パスポートも有効）**

野外展示　園内解説板の維持

平成 24 年度より、園内公開区域内に写真付きの樹木・サクラ解説板を設置しています(各 67 枚、53 枚)。また昨年度より、来園者の安全のために獣との適切な関わり方の啓発看板を設置しています(18 枚)。

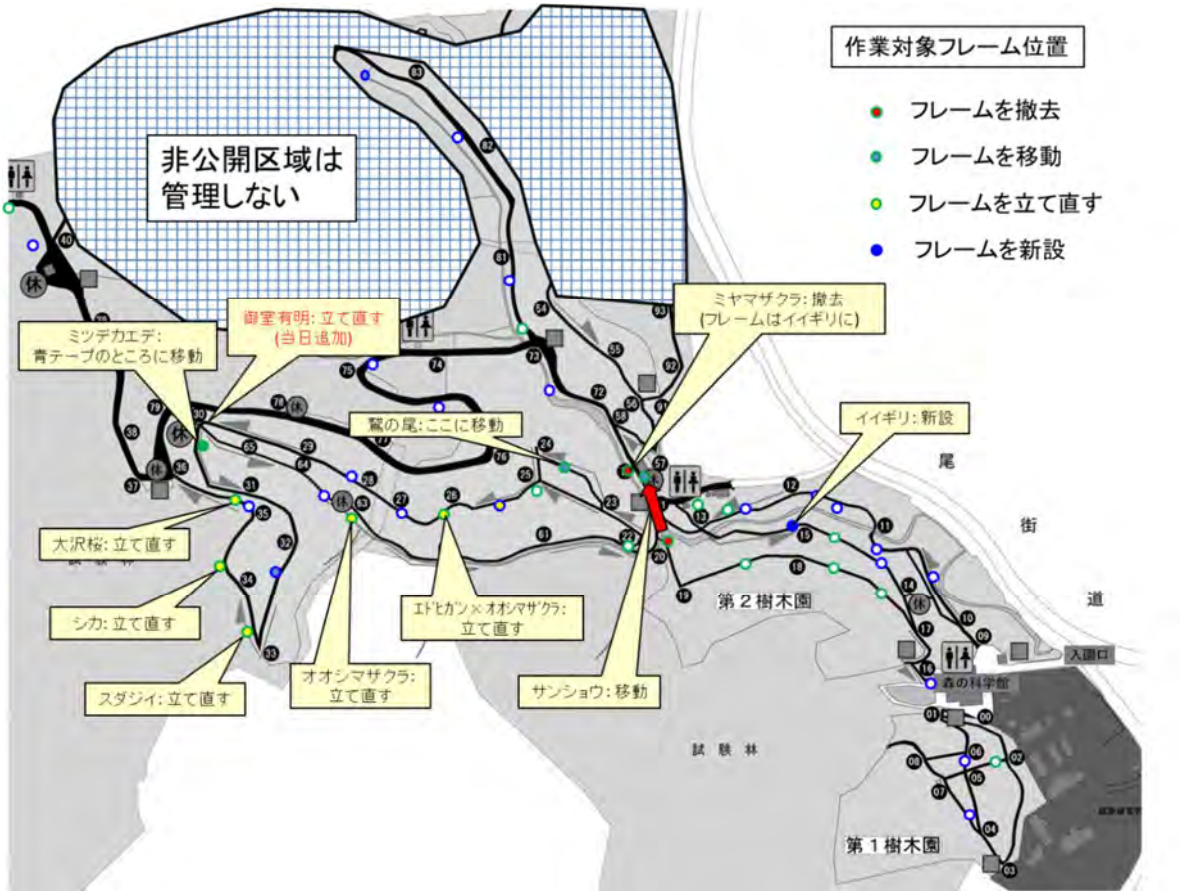
設置ずみの解説板の一部については毎年、紫外線による退色、野生動物によるものと推測される破損などがみられ、劣化したものは更新の必要が生じます。そのため、今年度も劣化した解説板の更新を行いました。

具体的な作業としては、まずリストと位置図を持って現地を一通りまわり、必要な作業をリストにメモしながら交換が必要なパネルを回収しました。回収したパネルで破損のないものは可能な限り再利用し、新たなパネルを作成して現地に再設置しました。

これら一連の作業は、解説板管理を依頼した研究専門員、設置に関わった各分野の研究者と非常勤職員、広報展示事務局有志によって行いました。また、解説板設置用のフレームについて、撤去や移動が必要なものは、業務課に作業を依頼しました。これらにより、サクラが開花し来園者が増加する春までに公開範囲内の今年度の維持管理作業は完了しました。

今後、解説板維持を担当する職員の入れ替わりも見込まれますが、永続的な解説板維持体制を構築していきたいと考えています。

（島田和則）



今年度の解説板フレーム管理作業の概況

視察受入・学習入園・特別入園

１．視察受入

年　月　日	受入機関	人数
令和７年６月２３日	長野県林業総合センター	３名
令和７年８月２１日	中国西華師範大学	１７名

２．学習入園

年　月　日	校（園）名	入園者数
令和７年　５月１４日	認定こども園 元八王子幼稚園	４８名
令和７年　６月　６日 ２０日 ２７日	日本大学生物資源科学部森林学科（１年）	延べ５４名
令和７年　７月１０日	東京都立南多摩中等教育学校（１学年）	５８名
令和７年　９月２５日	八王子市立第七中学校（１学年）	１２名
令和７年１０月　８日	学校法人東京内野学園　東京ゆりかご幼稚園	８５名
令和７年１０月３１日	学校法人タイケン学園　日本ペット＆アニマル専門学校	２８名
令和７年１２月１７日	沖縄県立北部農林高等学校	１７名

３．特別入園

年　月　日	入　園　者	入園者数
令和７年　６月　３日 ７月１５日	林野庁森林技術総合研修所 「令和７年度 森林土木(森 ICT 活用)１研修」	延べ５６名
令和７年　９月　２日	林野庁森林技術総合研修所 「令和７年度 森林総合監理士育成(実習)１研修」	１８名
令和７年　９月　９日	林野庁森林技術総合研修所 「令和７年度 森林立地・施業技術研修」	２９名
令和７年１０月　１日	林野庁森林技術総合研修所 「令和７年度 森林総合監理士育成(実習)２研修」	１６名
令和７年１１月２６日	林野庁森林技術総合研修所 「令和７年度 情報処理(森林情報の取得・利活用)研修」	２６名

整備計画等の実行状況

１．基盤整備等

１）整備関係

ａ．林内施設等整備

・公開エリアのベンチの作成、補修、杭・ロープの交換

・経路の土留工（昭和林道、仲通り：縮小した公開エリアの一部再開を目指す）

ｂ．災害復旧

・風倒木、雪害木等の伐採・搬出処理（サクラ保存林、樹木園、試験林、構内）

ｃ．支障木伐採

・境界際及び経路際の支障木伐採

・枯損木の処理（サクラ保存林、樹木園、建物周辺、廿里）

・経路・車道に関わる枯損木の処理

ｄ．ニホンジカ、イノシシ、ニホンザル対策

・防鹿フェンス・防鹿ネットの点検・補修

・イノシシ防除フェンス・防除ネットの補修

・掘り返し跡の原状回復

２）各作業関係

ａ．植栽

・サクラ苗木植栽地の不要木を伐採、枝下ろしの実施

・サクラ保存林内にサクラ苗木を植栽（緑化テープで根巻き）

ｂ．刈り払い

・サクラ保存林　　夏前にススキを中心に刈り払い。冬に全刈りを年１回実施

・歩　　道　　適宜実施

・林　　道　　〃

・樹　木　園　　〃

・試　験　林　　〃

・都　道　沿　　〃

ｃ．病虫害防除

・スカシバコン取付

ｄ．施肥

・枯損木等を伐採・剪定した材や枝条をチップ化し、サクラ保存林等の土壌改良に活用

ｅ．薪・板材作り

・薪置場を整備

・伐採した被害木等を薪や板材として有効利用

ｆ．連光寺実験林の管理

・孟宗竹、四方竹、亀甲竹、真竹の竹林管理及びチップ化

・風倒木、枯損木等の処理

・刈り払い（歩道、記念館通り沿道、宿舎跡地）

・樹木の生長試験地の整備（宿舎跡地）

・巡視（境界越境木等の確認）

ｇ．赤沼実験林の管理

・孟宗竹の竹林管理（６林班ろ小班他）

・枯損木、支障木の伐採、枯れ枝剪定

・刈り払い（建物周辺、林道、作業道、２林班い小班他）

・外来種駆除（５月、６月）

・巡視（境界越境木等の確認）

２．その他の整備

１）構内・苗畑等の維持管理

・巡視（境界越境木等の確認）

・剪定、刈り込み、刈り払いを必要の都度適宜実施

・苗畑（３箇所）を除草及び耕耘等整備

２）サクラ保存林・樹木園等の維持管理

・巡視（支障木等の確認）

・サクラ等支柱の取替・補修

・経路こも敷き（サクラ保存林）

・ナラ枯れ木の調査、伐採等

・側溝、横断溝の廃土

・試験林調査路の整備

・枯れ枝落とし

・折れ枝処理

３）連光寺及び赤沼実験林の請負管理（巡視・刈払い等）

４）外来種等駆除

・樹木研究室と共催で外来種駆除デーの実施

６月（キショウブ、セリバヒエンソウ、ペラペラヨメナ、ヒメムカシヨモギ、
オオアレチノギク、セイタカアワダチソウ）

９月（オオモクゲンジ、カンレンボク、イヌビワ、トウネズミモチ）

・アレチウリの駆除（７月～９月）

・日常作業の中で、外来種駆除デーで情報共有した外来種を適時除去

５）都道沿い法面の草地管理

・刈り払い

６）標本管理

・植物標本庫（分類同定室に保管する数万点のハーバリウム）の害虫等防除

３．環境教育林委員会

・委員会を開催し、次年度委員会の計画、フィールド使用計画、サクラ保存林他の整備等について確認

「外来植物駆除デー」の実施

2012 年度より当時の園長の提唱で始めた「外来植物駆除デー」を、樹木研究者が企画し業務課と調整して毎年 1～3 回実施している。これは、園内で特に問題となる外来種を選び、協同で除去作業を行いながら職員間で意識共有することを目指している。参集は全職員に行い、主力の樹木研究者、業務課のほか、園長や総務課からも参加している。

2025 年度は、6 月 16 日、9 月 19 日の 2 回行った。

第 1 回　6 月 16 日

対象地：構内(庁舎周辺)

対象種：ムラサキカタバミ：今年急激に増えた種。園内に拡散する前に抑えたい。

セリバヒエンソウ：近年急増し園内広域に拡散。

アレチヌスビトハギ：種子が非常に厄介。科学園で管理している赤沼実験林で多く、移入・定着を防ぎたい。

参加：業務課 7 名、樹木研 4 名、その他 2 名、計 13 名

内容と振り返り：

メインの除去対象種は今年になって急増したムラサキカタバミとした。ムラサキカタバミは種子をつくらないが、木子(微細な小球根)による非常に旺盛な繁殖力があり、園内への拡散を危惧した。また、昨年から注意しているセリバヒエンソウ、赤沼実験林に多く園内での定着・拡散を防ぎたいアレチヌスビトハギも除去対象とした。

ムラサキカタバミは庁舎周辺ほぼ全域にわたってみられた。ムラサキカタバミは地下の木子(微細な小球根)によって繁殖するため、根掘り・ねじり鎌・シャベルなどを使って、極力地下部から取ってビニール袋に集め、あとでテニスコートの舗装面にさらすようにした。真夏日が予想されたので、作業は 1 時間半で終了したが、同定室の裏と正門から旧庁舎裏に通じる通路上にまとまった集団を残した。後日対応したい。

セリバヒエンソウは日常的に非常勤職員が除去していたので、今回は極めて少なかった。アレチヌスビトハギはテニスコート周辺に少数みられた程度であった。ただ、両種とも繁殖力が強いため、今後も気をつけていきたい。

今回の対象種に限らず、日々の確認と除去により、外来種の拡散を防いでいくことは今後も重要である。

第 2 回　9 月 19 日

対象地：構内、第 1 樹木園、第 3 樹木園

対象種：展示樹木から逸出した実生：主にオオモクゲンジ、イヌビワ、ニワウルシ、カンレンボク、トウネズミモチ

※その他、アレチヌスビトハギ、コセンダングサなど

参加：園長、業務課 7 名、樹木研 4 名、その他 1 名、計 13 名

作業の概要：

作業は 2 班に分けて行った。

1 班は構内で行った。昨年よりも多くみられたアレチヌスビトハギを除去した。除去に先立って在来のヌスビトハギとの違いを説明した。今年は根から確実に抜くために小さいシャベルを用意したが、想像以上に根が深く、あとから大きいスコップを出してきて使った。上段の苗畑付近に固まって生育していたアレチヌスビトハギの集団は、重機で掘り起こして処理した。作業しながら移動し、ロータリー南側のエリアではオオモクゲンジ、イヌビワを中心に除去した。また、同定室裏にはイヌビワの大きくなった株の一部に結実が見られたので、除去の目印である黄色の標識テープを巻いて、業務課に後日地上部を伐る作業を依頼した。第 1 樹木園ではイヌビワを中心に除去。また、業務課裏のトイレ周辺などでもアレチヌスビトハギが多く発生しており除去。11 時頃に作業を終了し 1 班は解散。

2 班は第 3 樹木園のオオモクゲンジを除去。その後第 2 樹木園でオオモクゲンジを探索しながら 11 時頃に戻る。10 時半頃に 1 班からの連絡のより作業を終了し、11 時前にロータリー付近で 1 班と合流。

全体作業を終了したのち有志で残り、除去したアレチヌスビトハギを袋詰め作業。種子のついているアレチヌスビトハギは、放置すると発芽する恐れがあるので、総務課に依頼して可燃ごみとして処分。それ以外の除去した外来種は堆肥として処分。

振り返り：

今年は構内でアレチヌスビトハギが昨年よりかなり増加していた。アレチヌスビトハギの多い赤沼実験林より、衣服や車、道具などに種子が付着して入ってきている可能性が考えられる。アレチヌスビトハギは種子が衣服等に在来種より強く付着し、払ったくらいではとれないため、繁茂させてしまうと構内作業の際に支障となる。今後も増やさないよう、発見したら随時根から抜くようにするなど、日ごろの注意が重要である。

ロータリー南側のエリアは例年通り引き続き行った。オオモクゲンジ、イヌビワ等の大小多くの個体が見られたが、昨年よりは減少していた印象である。この他、構内で少数のニワウルシが見られ、除去を行った。

第 1 樹木園でも昨年イヌビワの大きい個体を除去したことにより、今年の発生数は少なかった。ただし、以前伐ったイヌビワの株から再成長した幹が開花を始めていた。同定室裏のものは急斜面のため根から除去すると斜面が崩れる恐れがあるので、幹だけ伐ることにしたが、今後再成長して再び大きくなったら改めて伐るといった数年単位のサイクルで管理していく必要がある。

第 3 樹木園ではオオモクゲンジの母樹が 1 本あり、その周辺に実生が出ていた。母樹が

ある限り今後もオオモクゲンジの実生の発生は続くことになる。

第 2 樹木園にもオオモクゲンジの母樹があり、これは観察・ガイド用に今後も維持したいため、この周辺に発生するオオモクゲンジの実生について除去を行う必要がある。作業を行った構内や第 1・第 3 樹木園も取り残しや再生個体があるかもしれない。今回の作業で終わりではなく、今後も参加した職員各自が、気がついたら除去するように心がけることが望まれる。

(島田和則)



アレチヌスビトハギの除去作業

（資料１０－２）

オオキンケイギク（特定外来生物）の駆除

令和４(2022)年６月上旬に赤沼実験林（埼玉県鳩山町）において、オオキンケイギクが多数生育していることが初めて確認された。また、同年８月上旬には連光寺実験林（東京都多摩市）においても僅かながら生育が確認され、両実験林内の駆除作業を実施した。

オオキンケイギクは北米原産のキク科の多年草で、関東地域では５月～８月にかけてコスモスに似た黄色の花を咲かせる。繁殖力があまりにも強く、いったん定着してしまうと在来植物の生育場所を奪い、周囲の環境を一変させてしまうため、平成18(2006)年に「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」に基づく特定外来生物に指定され、生きたままの運搬や栽培、譲渡などが原則として禁止された。

令和７年度も引き続き赤沼実験林に２回出向き、生育状況の確認及び駆除作業を実施した。

【赤沼実験林】

生育場所は、旧実験室の西側、旧実験室から南東方向の４林班・５林班・６林班及び各林班間の道沿い。

１回目 6月10日（７名）

花又はつぼみの状態の個体は前年よりも減っていたものの100本程度の生育を確認し、花がついていない小さな株についても多数を駆除。この時期であれば実ができる前に駆除が可能。

２回目 7月17日（６名）

今回も花又はつぼみの株が約20本確認された。花やつぼみのない株は約100株を駆除した。

【連光寺実験林】

令和４年に生育が確認された場所は、宿舎跡の草地。

令和５年度の２回目の駆除作業以来、生育は見られていない。前年に引きつづき令和７年度は駆除作業を実施していない。

赤沼実験林では前年よりも個体数が減少しているものの、今後も定期的に駆除を続けていく必要がある。連光寺実験林では昨年に引き続き生育は確認できなかったものの、引き続き注意して確認していく必要がある。

オオキンケイギクの駆除方法

１．開花・つぼみ株、花がついていない小さな株ともに根から抜き取る。
２．結実している個体は種子などが飛散しないようにビニール袋等に入れ、それ以外の個体も生きている間は再び根付く可能性があるので、搬出せずに敷地内で枯死させる。
３．完全に枯死したことを確認してから廃棄処分をする。

（高橋幸三）



オオキンケイギク（黄色の花）



花が咲く前の株





ビニール袋に入れて腐朽処理

参 考 資 料

１．沿　　革

1921 年（大正 10）	2 月	宮内省帝室林野管理局林業試験場として発足する
1927 年（昭和 2）		大正天皇崩御により多摩陵治定旧武蔵墓地から気象台を移転する
1940 年（昭和 15）	1 月	皇室令により帝室林野局東京林業試験場となる
1945 年（昭和 20）	8 月	大空襲により庁舎及び実験室の大部分を焼失する
1947 年（昭和 22）	4 月	林政統一により農林省林業試験場浅川支場となる
1950 年（昭和 25）	4 月	林産部門の本場集中に伴い浅川分室となる
1957 年（昭和 32）	7 月	浅川実験林と改称する
1958 年（昭和 33）	12 月	浅川実験林の内部組織は庶務係と樹木研究室になる
1966 年（昭和 41）	9 月	サクラ保存林の造成を開始する
1967 年（昭和 42）	6 月	浅川実験林主任は浅川実験林長と改称する
		庶務課と天敵微生物研究室が設置される
1978 年（昭和 53）	4 月	農林省告示規定官署の支場となり会計係と業務室が設置される
		赤沼試験地と所属の樹芸研究室が浅川実験林へ編入される
		天敵微生物研究室が本場保護部に所属変更になる
1980 年（昭和 55）	4 月	多摩試験地が開設される
1988 年（昭和 63）	10 月	組織改編により森林総合研究所多摩森林科学園となる
		業務室が業務課に、樹芸研究室が森林生物研究室になる
		普及広報専門官が設置され赤沼試験地と多摩試験地が本所直轄となる
1989 年（平成元）	5 月	業務課に施設管理係が設置される
1990 年（平成 2）	6 月	業務課に研修展示係が設置される
1991 年（平成 3）	4 月	業務課に育林専門官が設置され「森の科学館」が開設される
1992 年（平成 4）	4 月	有料による通年一般公開を開始する
2001 年（平成 13）	4 月	独立行政法人へ移行する
		育林専門官が業務係長となる
		チーム長が設置される
		樹木研究室及び森林生物研究室が教育的資源研究グループとなる
		多摩試験地が多摩森林科学園へ編入される
2006 年（平成 18）	4 月	非特定独立行政法人へ移行する
		赤沼試験地が多摩森林科学園に編入される
	10 月	多摩試験地を連光寺実験林、赤沼試験地を赤沼実験林に改称する
2015 年（平成 27）	4 月	国立研究開発法人へ移行する
2016 年（平成 28）	4 月	普及広報専門職が業務課長補佐となる
2017 年（平成 29）	4 月	国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所多摩森林科学園へ名称変更する
2018 年（平成 30）	4 月	庶務課が総務課となる

２．職員の異動（令和７年 ４月 ２日～令和８年 ４月 １日まで）

(転入)
8. 4. 1　園長　←　研究ディレクター(林業生産技術研究担当)

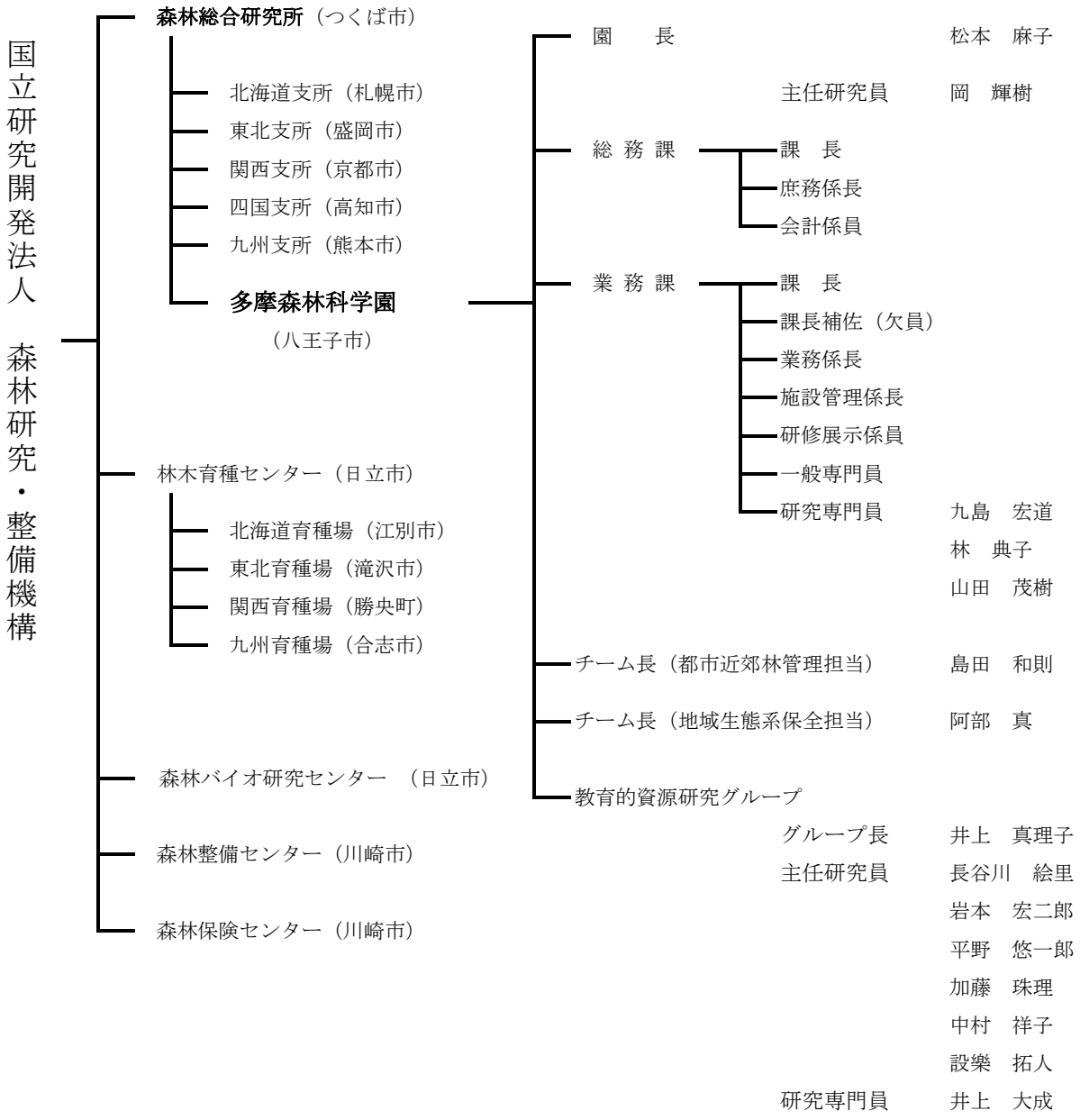
(転出)
8. 4. 1　園長　→　研究コーディネーター(地域イノベーション推進担当)
8. 4. 1　業務課業務係長　→　企画部研究管理科専門職
8. 4. 1　チーム長(地域生態系保全担当)　→　企画部研究管理科実験林室長

(退職)
8. 3.31　研究専門員　→　任期満了　（３名）

(内部異動)
8. 4. 1　業務課施設管理係長　→　業務課業務推進役(施設管理担当)
8. 4. 1　チーム長(都市近郊林管理担当)　→　主任研究員
8. 4. 1　主任研究員(教育的資源研究グループ)　→　チーム長(サクラ類病害担当)

３．組織

（令和８年３月３１日現在）



職員数　　**23 名**

一般職員　8 名（うち一般専門員１名）

研究職員　15 名（うち研究専門員４名）

４．土地及び施設

多摩森林科学園

1）土　地

建物敷地	１．００ha
苗　畑	０．４１
樹木園	６．９４
サクラ保存林	７．９６
試験林	３９．８１
計	５６．１２ha

2）施　設

研究本館	４７８㎡
会議室	２４９
分類同定室	３４４
分析実験室	６０
温室	１２１
管理室	１７８
農具及び資材庫	２７７
車　庫	２０１
研修展示館	９７０
外便所	４８
その他	１９１
計	３，１１７㎡

連光寺実験林

1）土　地

建物敷地	０．４３ha
実験林	３．４２
試験研究施設	１．２３
計	５．０８ha

2）施　設

森林生態研究棟	３７２㎡
計	３７２㎡

赤沼実験林

1）土　地

建物敷地	０．１８ha
試験林	４．９２
樹木園	１．９６
試験研究施設	０．０１
その他	０．０７
計	７．１４ha

2）施　設

管理棟	２２６㎡
計	２２６㎡

令和８(2026)年１０月発行

森林総合研究所多摩森林科学園年報
第４８号　令和８年版

編集・発行　国立研究開発法人 森林研究・整備機構
森林総合研究所 多摩森林科学園
〒193-0843 東京都八王子市廿里町１８３３－８１
TEL（０４２）６６１－１１２１
https://www.ffpri.go.jp/tmk/

転載・複製する場合は多摩森林科学園の許可を得てください